

和 井 田 遺 跡
成 恒 山 ノ 内 遺 跡
八 ツ 並 下 ノ 原 遺 跡

- 福岡県築上郡吉富町・上毛町所在遺跡の調査 -

福岡県文化財調査報告書 第251集

2016

九州歴史資料館

和 井 田 遺 跡
成 恒 山 ノ 内 遺 跡
八 ツ 並 下 ノ 原 遺 跡

-福岡県築上郡吉富町・上毛町所在遺跡の調査-

福岡県文化財調査報告書 第251集



1. 和井田遺跡 1号竪穴住居跡土器出土状況（西から）



2. 和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土土器

序

福岡県では、平成5年度・11年度・23年度に、一般県道吉富港線・山内吉富線の道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。本報告書は、その折に調査した築上郡吉富町広津に所在する和井田遺跡、築上郡上毛町に所在する成垣山ノ内遺跡、ハッ並下ノ原遺跡の調査の記録です。

今回の調査では、弥生時代から中世にいたる生活の痕跡を確認することができました。特に和井田遺跡では、これまで発掘調査の機会が少なかった吉富町において、弥生時代後期～古墳時代の集落の一部を確認し、多くの土器資料を確認することができました。また、成垣山ノ内遺跡では古代に属する溝を検出し、ハッ並下ノ原遺跡では、奈良時代の大型掘立柱建物1棟を確認したことで、豊前地域の律令期の様相の一端を窺い知ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成28年3月31日

九州歴史資料館長

館長 杉光 誠

例　言

1. 本書は、一般県道吉富港線及び山内吉富線の道路改良事業に伴って発掘調査を実施した、築上郡吉富町に所在する和井田遺跡、築上郡上毛町に所在する成恒山ノ内遺跡、八ツ並下ノ原遺跡の調査の記録である。
2. 発掘調査・整理報告は、福岡県県土整備部（旧土木部）道路建設課の執行委任を受けて、平成22年度までは福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、平成23年度からは九州歴史資料館が実施した。
3. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、飛野博文、小池史哲、秦憲二、齋部麻矢の各担当者が行い、遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影はそれぞれ有限会社空中写真企画・東亜航空株式会社・有限会社フォト・オオツカに委託し、バルーンおよびラジコンヘリによる撮影を行った。
4. 本書に掲載した遺構図の作成は各担当者が行い、それぞれ発掘作業員が補助した。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、岡田論の指導の下に実施した。また、石製品・土製品の一部の実測は城門義廣が行った。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の1/50,000地形図「中津」を改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。
8. 平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。
9. 本書の執筆については各担当者が行い、編集は齋部が行った。

目 次

序

例言

目次

図版目次

挿図目次

表目次

Iはじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査・整理の関係者	2
II位置と環境（齋部）	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III調査の内容	8
1 和井田遺跡（齋部）	8
2 成恒山ノ内遺跡（飛野）	52
3 八ッ並下ノ原遺跡（秦・小池）	58
IVおわりに（齋部）	70

図版目次

和井田遺跡

巻頭図版 1-1 和井田遺跡1号竪穴住居跡土器出土状況（西から）

 1-2 和井田遺跡1号竪穴住居跡出土土器

図版1 1. A調査区・B調査区南半部（北東上空から）

 2. B調査区北半部（北西上空から）

図版2 B調査区全景（上空から 右下が北）

図版3 1. 1号竪穴住居跡土器出土状況、土層断面西半部（北から）

 2. 1号竪穴住居跡土器出土状況（東から）

 3. 1号竪穴住居跡土器出土状況（北東隅、南西から）

図版4 1. 1号竪穴住居跡南東隅土坑 柄杓型木製品出土状況（南から）

 2. 1号竪穴住居跡完掘状況（西から）

 3. 1号竪穴住居跡完掘状況（上空から 上が東）

図版5 1. 2号竪穴住居跡土層断面（東から）

 2. 2号竪穴住居跡土器出土状況（西から）

3. 2号竪穴住居跡完掘状況（西から）
- 図版 6 1. 3号竪穴住居跡土器出土状況（北西から） 2. 3号竪穴住居跡完掘状況（北西から）
3. 4号竪穴住居跡（北東から）
- 図版 7 1. 5号竪穴住居跡（東から） 2. 6号竪穴住居跡（西から）
3. 7号竪穴住居跡土器・炭・焼土出土状況（東から）
- 図版 8 1. 7号竪穴住居跡土器出土状況（南東から） 2. 7号竪穴住居跡完掘状況（北東から）
3. 1号土坑土層断面（南東から）
- 図版 9 1. 2号土坑土器出土状況（北から） 2. 4号土坑土層断面（南西から）
3. トレンチ土層（西から）
- 図版 10 1. 1号溝土層断面（南東から） 2. 1号溝全景（南東から）
3. 石列遺構（南から）
- 図版 11 1号竪穴住居跡出土土器（1）
- 図版 12 1号竪穴住居跡出土土器（2）
- 図版 13 1号竪穴住居跡出土土器（3）
- 図版 14 1号竪穴住居跡出土土器（4）
- 図版 15 1号竪穴住居跡出土土器（5）
- 図版 16 1号竪穴住居跡出土土器（6）
- 図版 17 1号竪穴住居跡出土土器（7）
- 図版 18 1号竪穴住居跡出土土器（8）
- 図版 19 1号竪穴住居跡出土土器（9）
- 図版 20 2・3・4・6・7号竪穴住居跡出土土器
- 図版 21 7号竪穴住居跡・1・3号土坑出土土器・出土石製品
- 図版 22 出土石製品・土製品

成恒山ノ内遺跡

- 図版 23 1. 調査区全景（北西から）
2. 調査区南端（北上空から）
3. 1・2号溝南半（南西から）
- 図版 24 1. 2号溝南半（東から） 2. 3号溝全景（南東から）
3. 3号溝西半（南東から）
- 図版 25 1. 3号溝以北（南西から） 2. 3号溝以北（北東から）
3. 東調査区全景（北東から）
- 図版 26 成恒山ノ内遺跡出土遺物

八ツ並下ノ原遺跡

- 図版 27 1. I区全景（南西上空から） 2. 1号掘立柱建物跡（南西から）
3. 1号掘立柱建物跡柱6土層面（東から） 4. 1号掘立柱建物跡柱7土層断面（東から）

5. 1号溝状遺構・1柵跡検出状況（南から） 6. 1号溝状遺構土層断面（東から）

7. II区全景（南西上空から）

図版 28 ハッピーノ原遺跡出土遺物

挿図目次

第1図	吉富町・上毛町の位置	3
第2図	周辺遺跡分布図（1/50,000）	5
第3図	和井田遺跡周辺地形および調査区位置図（1/1,000）	9
第4図	和井田遺跡遺構配置図（1/300）	11
第5図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡実測図（1/60）	12
第6図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（1）（1/3）	14
第7図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（2）（1/3）	15
第8図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（3）（1/3）	16
第9図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（4）（1/3）	17
第10図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（5）（1/3）	18
第11図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（6）（1/3）	19
第12図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（7）（1/3）	20
第13図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（8）（1/3）	21
第14図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（9）（1/3）	22
第15図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（10）（1/3）	23
第16図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（11）（1/3）	24
第17図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（12）（1/3）	25
第18図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（13）（1/3）	26
第19図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（14）（1/3）	27
第20図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（15）（1/3）	28
第21図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（16）（1/3）	29
第22図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（17）（1/3）	30
第23図	和井田遺跡 1号竪穴住居跡出土遺物実測図（18）（1/3）	31
第24図	和井田遺跡 2号竪穴住居跡実測図（1/60）	33
第25図	和井田遺跡 2号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	33
第26図	和井田遺跡 3号竪穴住居跡実測図（1/60）	34
第27図	和井田遺跡 3号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	35
第28図	和井田遺跡 4・5号竪穴住居跡実測図（1/60）	36
第29図	和井田遺跡 4号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	36
第30図	和井田遺跡 6号竪穴住居跡実測図（1/60）	37
第31図	和井田遺跡 6号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	37

第 32 図	和井田遺跡	7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	38
第 33 図	和井田遺跡	7号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)	39
第 34 図	和井田遺跡	7号竪穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/3)	40
第 35 図	和井田遺跡	1~4号土坑実測図・1号溝断面実測図 (1/60)	41
第 36 図	和井田遺跡	土坑・溝・ピット・石列・埋甕遺構出土遺物実測図 (13は1/6、他は1/3) ..	42
第 37 図	和井田遺跡	出土特殊遺物実測図 (1) (3~5は1/1、他は1/2)	43
第 38 図	和井田遺跡	出土特殊遺物実測図 (2) (1/4)	44
第 39 図	和井田遺跡	出土特殊遺物実測図 (3) (1/4)	45
第 40 図	和井田遺跡	出土特殊遺物実測図 (4) (27・28は1/4、他は1/2)	46
第 41 図	成恒山ノ内遺跡	溝土層・断面実測図 (1/40)	52
第 42 図	成恒山ノ内遺跡	遺構配置図 (1/1,000, 1/400)	53
第 43 図	成恒山ノ内遺跡	3号溝実測図 (1/40)	54
第 44 図	成恒山ノ内遺跡	出土遺物実測図 1 (1/3)	55
第 45 図	成恒山ノ内遺跡	出土遺物実測図 2 (2/3)	56
第 46 図	成恒山ノ内遺跡	周辺地形図	57
第 47 図	八ッ並下ノ原遺跡	周辺地形図 (1/2,000)	58
第 48 図	八ッ並下ノ原遺跡	遺構略配置図 (1/1,000)	59
第 49 図	八ッ並下ノ原遺跡	I・II区全体図 (1/300)	59
第 50 図	八ッ並下ノ原遺跡	1号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	61
第 51 図	八ッ並下ノ原遺跡	1号溝状遺構・1号柵跡実測図 (1/60)	62
第 52 図	八ッ並下ノ原遺跡	出土土器実測図 (1) (1/3)	63
第 53 図	八ッ並下ノ原遺跡	その他の遺構・土層実測図 (3は1/40、他は1/60)	64
第 54 図	八ッ並下ノ原遺跡	出土土器実測図 (2) (1は1/4、他は1/3)	65
第 55 図	八ッ並下ノ原遺跡	出土石・金属製品実測図 (3は1/2、他は2/3)	66
第 56 図	八ッ並下ノ原遺跡	大ノ瀬官衙遺跡の関係図 (1/2,000)	68
第 57 図	八ッ並下ノ原遺跡	車輪文タタキ当て具痕比較図 (1/2)	69

表目次

表 1 和井田遺跡出土石器一覧表	51
------------------------	----

I はじめに

1 調査に至る経緯

今回報告する調査は、いずれも福岡県京築県土整備事務所（旧豊前土木事務所）の事業に関わるものである。

和井田遺跡の調査は一般県道吉富港線道路改良事業に伴うもので、吉富町の吉富港を起点として吉富町直江東に達する一般県道である。平成 20 年度に福岡県京築県土整備事務所から教育庁総務部文化財保護課へ文化財の有無についての照会があった。工事施工予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、あまり開発されていない土地であり、周辺の遺跡所在状況から試掘調査が必要であると回答した。平成 21 年 2 月 24 日に、文化財保護課は路線予定地の用地取得が終了した調査区南側の一部にトレーニングを設定して試掘調査を実施した。その結果、数基のピットと土坑 1 基と土師器片数点を確認したことから発掘調査が必要な旨を回答し、調査費用・調査期間等を協議、事務手続きが終わった後に調査に着手した。平成 23 年 10 月 28 日に重機を使用しての表土剥ぎを開始し、平成 24 年 2 月 9 日に全ての作業を終了して撤収した。

成恒山ノ内遺跡の調査の契機は、福岡県文化課（現文化財保護課）が平成 4 年度に県庁内関係各課に対して行った「平成 5 年度実施予定の各種開発事業」の問い合わせに対し、回答された開発事業一覧の中にこの県道山内吉富線道路改良工事（拡幅）が含まれていたことによる。工事施工予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、水田と住宅が混在するあまり開発されていない土地であったことから、文化財調査担当の京築教育事務所は工事担当の豊前土木事務所（現京築県土整備事務所）に対して試掘調査が必要な旨を回答した。平成 5 年度、改めて試掘調査の日程調整を行い、11 月 8 日に試掘調査を実施した。その結果、柱穴を確認したことから発掘調査が必要な旨を回答し、事務手続きが終わった後に調査に着手した。発掘調査は平成 5 年 12 月 1 日に重機を使用しての表土掘削を開始し、12 月 24 日に全ての作業を終了して撤収した。

ハッ並下ノ原遺跡も同じく県道山内吉富線道路改良工事に伴うものであり、平成 10 年度以降、西吉富小学校からハッ並集落区間で拡幅用地取得が終了した部分について、断続的に豊前土木事務所から文化財有無の照会があり、その都度、試掘調査を実施してきた。平成 11 年度にはハッ並集落付近の拡幅用地が対象になり、ハッ並集落南西端付近の試掘調査でまとまった遺構は確認されなかったものの、須恵器・土師器片が出土したため付近に遺構の存在が予想された。また、国指定史跡大ノ瀬官衙遺跡に近く、八並の地名は倉庫建物群の存在が考えられる地名であることと、官衙遺跡から続く古代官道に近いことから、平成 11 年 11 月 16 日に、ハッ並集落付近の拡幅用地で試掘調査を実施した。その結果として、調査が必要な旨を回答し、本調査実施の運びとなった。平成 11 年 12 月 13 日から表土剥ぎを始め、平成 12 年 1 月 6 日に全ての作業を終了して撤収した。なお、調査中に盗難によって調査日誌と写真を失い、調査の経緯を詳細に記すことができなかった。

2 調査・整理の関係者

本報告書に掲載した各遺跡の発掘調査・報告書作成に至る間の関係者は以下のとおりである。平成 23 年度以降は組織改革により、埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館に移管された。

平成 5 年度 平成 11 年度 平成 20 年度 平成 23 年度 平成 27 年度

教育庁文化財保護課

総括

教育長	光安常喜	光安常喜	森山良一	杉光 誠	城戸秀明
教育次長		藤吉純一郎	柄崎洋二郎	荒巻俊彦	西牟田龍治
総務部長		岩本 誠	荒巻俊彦	今田義雄	川添弘人(副本理)
文化財保護課長	森山良一	柳田康雄	磯村幸男(副本理)	伊崎俊秋	赤司善彦(副本理)
副課長			池邊元明		
参事		井上裕弘	新原正典		
課長補佐		角伸幸(兼管理係長)	前原俊史		
課長技術補佐		橋口達也(兼参事)		小池史哲(副本理)	
			伊崎俊秋(副本理)		
文化財保護室長	柳田康雄				
文化財保護室長補佐		井上裕弘			
調査班総括		副島邦弘			
調査第一係長	佐々木隆彦	児玉真一(參事補佐)		小田和利(參事補佐)	
参事補佐		中間研志			

庶務

管理係長	毛屋 信	角伸幸	富永育夫
主任主事	安丸重喜	佐藤雅二	藤木 豊

調査

【成恒山ノ内】	【八ツ並下ノ原】	【和井田試掘】	【和井田】
参事補佐		小池史哲(京葉教育事務所)	
主任技師	飛野博文	秦 憲二 岸本 圭	

九州歴史資料館

総括

館長		西谷 正	杉光 誠
副館長		南里正美	伊崎俊秋(副本理)
総務室長(企画主幹)		圓城寺紀子	塩塚孝憲

参事
文化財調査室長 (領主幹)

飛野博文
吉村靖徳

庶務

総務班長 (事務主幹)
事務主査
主任主事
主事

塙塚孝憲
熊谷泰容
近藤一崇
谷川賢治

中村満喜子
宮崎奈巳
西村知子
秦 健太

調査
技術主査

齋部麻矢

整理・報告報告作成

参事
学芸調査室広報普及班長 (參事補佐)
文化財調査室文化財調査班長
主任技師

飛野博文
齋部麻矢
秦 憲二
岡田 諭

II 位置と環境

1 地理的環境

築上郡上毛町・吉富町は福岡県の東部に位置し、南北に隣接する町で、大分県中津市と隣接する県境の町である。東は山岳に発した一級河川である山国川を境に大分県中津市と接し、西は同支流の佐井川を境に豊前市と接する。

吉富町は瀬戸内海西端に位置する周防灘に面し、その地質は中新世中期の火山活動によって噴出した溶岩と火成碎屑岩が基盤となる。山国川・佐井川流域では沖積地、中央と佐井川の西では洪積台地が形成され、西南より北ないし東北の周防灘にむけて緩やかな傾斜をもつ平坦地がそのほとんどを占める。

吉富町に南接する上毛町は南側には山地が多く、その大半が安山岩類に属する角礫岩や安山岩からなっており、その先端部分に洪積層が連なって、山国川・佐井川流域では沖積層が形成される。山間部を除いては起伏が少なく、概ねなだらか田園地帯となっている。

2 歴史的環境

築上郡の所在する豊前地域は弥生時代から独特の文化を形成する地域であり、各時代の多数の遺跡が存在する。古墳時代には、渡来人の存在を証明するオンドル型住居や土器等を有する集落がいくつも確認されており、また、歴史時代では九州内でもいち早く寺院造営が行われ、7世紀後半段階では1郡に1寺院ほどの数の寺が建てられた。中でも、上毛町の垂水廃寺では新羅の影響を受けたと考えられる華麗な文様の軒瓦が7世紀後半に使用されており、国史跡の大ノ瀬遺跡など当時の大規模な官衙も確認されていることから、渡来人の存在とともに中央政府との密接なかかわりも認められる。さらには近年実施された東九州自動車道関連の調査でも新たな遺跡が多数発見されており、築上郡の歴史的環境については東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告書をはじめ多数の発掘調査報告書に記載されている。まずここでは、他報告書に記載の少ない、和井田遺跡が所在する吉富町を中心に記述する。

吉富町の遺跡や文化財については、昭和31年の『吉富町誌』^(註1)において岡為造氏が最初に記されている。岡氏は吉富町の郷土史を語る上で欠かせない人物であり、生涯を郷土の歴史を紐解くことに費やされた郷土史家である。吉富町を中心にして築上郡の各所で遺跡の確認や遺物の採集を行い、その資料については後年『岡為造氏収集考古資料集成』^(註2)の形で整理され、吉富町教育委員会から刊行されている。その後天仲寺古墳をはじめいくつかの遺跡が調査されているが、遺跡の調査件



第1図 吉富町・上毛町の位置

數自体が少ないとから、現在のところ岡氏の収集資料に勝る量の資料は確認されていない。

縄文時代では遺構は現段階では確認されていないが、楳生地区周辺で土器や石器が採集されている。弥生時代も同様であるが、別府地区では昭和の初めの地下げによって多量の弥生土器が出土したと伝えられている。なお、隣接する中津市や豊前市、上毛町では複数の集落が確認されており、遺物の採集や言い伝えも含めて吉富町内にも縄文～弥生時代の遺構があったことは推察できる。

古墳時代においては、複数の古墳群が確認され、その一部の調査が行われている。まず町指定史跡の楳生山古墳群は岡氏によって14基の古墳が確認され、昭和2年に発掘された折、そのうちの1基の6枚の天井石を持つ竪穴式石室から、直刀3振・鉄矛・鉄鎌が出土している。その後平成2年に墳丘の崩落防止の擁壁設置工事に伴い部分的に調査された^(注3)。主体部と思われる部分は対象地にならなかったが、認識されていた主墳丘の東側で前方部が確認され、前方後円墳であったことが明らかになった。また、築造時期については出土遺物が少量であることから明確ではないが、出土した土器・埴輪片や岡氏の採集資料とあわせ考え5世紀中葉前後に比定されており、調査担当者は前半代に遡る可能性も付け加えている。山国川流域で確認された貴重な前方後円墳である。同じく町指定史跡の天伸寺古墳も岡氏によって既に存在が指摘されていたが、昭和58年度に墳丘崩落防止工事に伴って調査が行われた^(注4)。主体部である横穴式石室は既に開口していたため、上毛町所在の国指定史跡「穴ヶ葉山1号古墳」より大きな規模な複室の横穴式石室を持つことは知られていた。調査の結果、石室規模は等地域最大級であることを確認し、また墳丘は全体の約1／8を残すのみであったが、2重の周溝を有する3段築成の円墳もしくは方墳であり、墳丘径約22mの大規模墳であることが確認された。石室内が盜掘を受けていることから出土遺物は少量であるが、須恵器や埴輪・銅鈴や留金具が出土しており、これにより6世紀後半～終末の築造年代が与えられている。また近くの広運寺古墳は天伸寺古墳と同時に調査されており、墳丘は既に崩落し、主体部の横穴式石室は腰石をわずかに残すのみであったが、周溝内で遺物がまとまって出土している。調査ではわずかに残存する遺構から直径12～13mの円墳ないし方墳であり、出土遺物から6世紀後半の築造であることが確認されている。その他楳生山古墳群の南に連なって位置する茶臼山古墳群・鈴熊山古墳群も岡氏によって墳丘9基・7基が確認され、資料が採集されているが、本格的な調査は行われていないことから、築造時期や規模などの全容は不明である。なお、この時代の集落は町内では確認されていないが、多数の古墳群の存在に加え、採集資料や佐井川河口の皇后石周辺で土師器が大量に出土したとの話もあり、集落が存在した可能性は極めて高い。

中世には天伸寺古墳と同じ丘陵に広津城が築かれ、これまで詳細な調査は行われていないが、本丸・二の丸・出丸や土塁などの遺構が残存している。この城は田部系広津氏の居城で、一説には宇都宮氏の一族広津氏の居城ともされる。戦国期の弘治3年（1557）にはこの城で激しい戦闘があつたことなどが記録にあるが、その後天正年間には黒田氏に降った。一時期黒田氏の拠点となつたこともあったが、中津城築城後には廃城となった。慶長5年（1600年）の石垣原の合戦後に、黒田孝高が居城の中津城には戻らず広津の古城に一泊したなどの記録もある。また同丘陵には、近世中津小笠原藩の初代藩主小笠原長次以下3代までの墓所が設けられており、町指定史跡となっている。

その他の史跡・遺跡以外の文化財では、鈴熊古墳群のある丘陵上に所在する金華山鈴熊寺の本尊であり、国の重要文化財に指定されている木造薬師如来坐像が著名である。鈴熊寺は豊前地域の修

駿道の拠点として信仰を集める医王寺の末寺のひとつである。中世の戦乱によって焼失・荒廃したが、本尊は近くの田に埋められて難を逃れ、元和年間に発見されたと伝えられる^(註5)。木造薬師如來坐像は像高87cmの広葉樹材一本造で、11世紀末～12世紀初頭に地元の仏師によって製作されたと考えられ、独特の表情と素朴で暖かみのある造形のお像である。本寺には他にも数多くの仏像や絵図などが守り伝えられているが、山腹に所在する「涅槃石」の名を持つ石造物が町の史跡に指定されている。高さ約2m、幅約3mの巨石に釈迦の涅槃像を取り囲んで菩薩や弟子などが浮き彫りされているもので、文政6年(1823)に彫刻したという記録が残っているとの事である^(註6)。

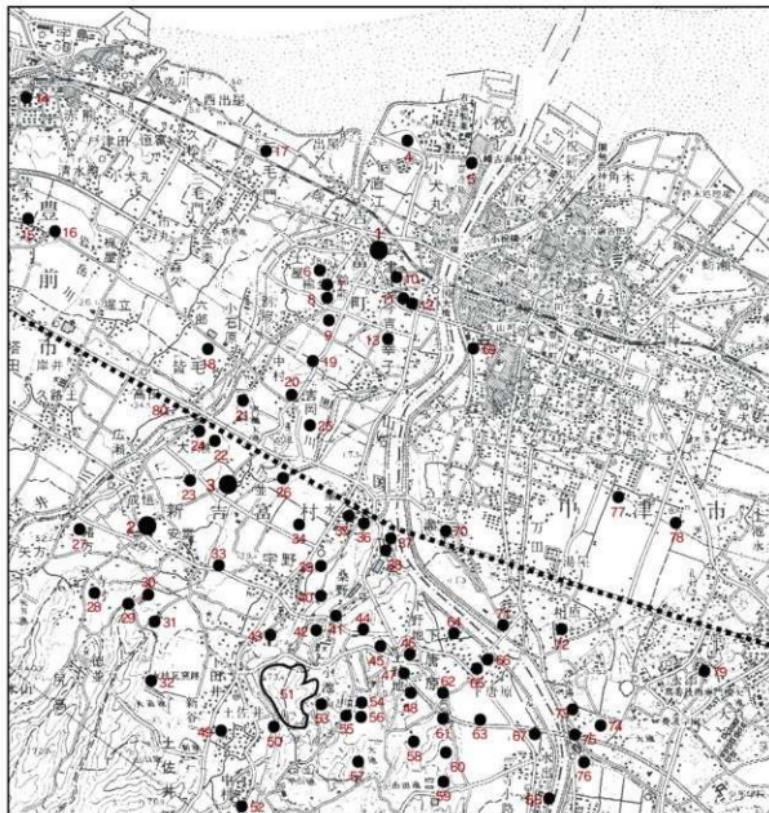
山国川西岸の河口付近、大字小犬丸に鎮座する八幡古表神社は、神功皇后を祭神とする神社である。当神社の4年に一度の放生会で奉納される「八幡古表神社の傀儡子の舞と相撲」の神事は国の重要無形民俗文化財に指定されており、「細男舞」と「神相撲」で構成されるもので、4年に一度の8月に、港から神輿を船に乗せて沖合に出て傀儡子の舞を奉納し、夜は神社境内でも奉納が行われる。神事の折に神殿より姿を見せる「木造女神騎牛像(社伝神功皇后御像)」は国の重要文化財に、使用されていた「傀儡子」は重要有形民俗文化財に指定されている。古く宇佐八幡宮の放生会が浜の浮殿で執行されていた時、その末社である当神社と中津市古賀神社の両社から傀儡子をのせ、浮殿に向かって舞を奉納していたという。宇佐八幡宮の放生会がなくなった現在は、古表神社の単独行事として伝承されている。神事の指定理由の中には「傀儡子の舞と相撲の芸能そのものは比較的単純であるが、その呪術的内容と人形の構造や操法には、他に類例をみない古格がうかがわれるのが貴重である」とされている。

註

- 1 吉富町 1955 「福岡県築上郡吉富町誌」
- 2 吉富町 1983 「萌為造氏収集考古資料集成」
- 3 吉富町教育委員会 1991 「椎生山古墳」 吉富町文化財調査報告書第3集
- 4 吉富町教育委員会 1983 「天仲寺古墳・広運寺古墳」 吉富町文化財調査報告書第1集
- 5 吉富町 1983 「吉富町史」
- 6 吉富町教育委員会 1986 「吉富町の文化財」



調査区から天仲寺古墳を望む



- | | | | | |
|--------------|---------------|---------------|---------------|--------------|
| 1. 和井田遺跡 | 2. 成恒山ノ内遺跡 | 3. 八ツ並下ノ原遺跡 | 4. 皇后石遺跡 | 5. 八幡古表神社 |
| 6. 鈴熊山古墳群 | 7. 茶臼山古墳群 | 8. 榆生山古墳群 | 9. 今吉遺跡 | 10. 広連寺古墳 |
| 11. 広津城跡 | 12. 天寺仲古墳 | 13. 矢頭田遺跡 | 14. 昭和町遺跡 | 15. 吉木遺跡 |
| 16. 吉本芦屋遺跡 | 17. 三毛門放生田遺跡 | 18. 小石原泉遺跡 | 19. 大塚古墳 | 20. 巨石塚古墳 |
| 21. 日熊山古墳群 | 22. 大ノ瀬官衙遺跡 | 23. フルノ遺跡 | 24. 下島ワカ遺跡 | 25. 吉岡遺跡 |
| 26. 池ノ口遺跡 | 27. 新方古墳群 | 28. 沈高烟田遺跡 | 29. 照日遺跡群 | 30. 山田1号墳 |
| 31. 山田瓦窯跡 | 32. 友枝瓦窯跡 | 33. ハタガタ遺跡 | 34. 三ツ溝遺跡 | 35. 垂水廐寺 |
| 36. 垂水高木遺跡 | 37. 牛頭天王遺跡 | 38. 中条野遺跡 | 39. 宇野重水遺跡 | 40. 宇野代遺跡 |
| 41. 上桑野遺跡 | 42. 桑野鶴古墳 | 43. 宇野台古墳群 | 44. 桑野遺跡 | 45. 大塚本遺跡 |
| 46. 能満寺前方後円墳 | 47. 小松原遺跡 | 48. 上の熊遺跡 | 49. 土佐井ミソンデ遺跡 | 50. 土佐井遺跡 |
| 51. 唐原古代山城 | 52. 今藏遺跡 | 53. ガサメキ古墳群 | 54. 穴ヶ葉山古墳 | 55. 穴ヶ葉山遺跡 |
| 56. 穴ヶ葉山南古墳 | 57. 恵良古墳群 | 58. 上ノ熊古墳群 | 59. 蓬山古墳群 | 60. 小山田古墳群 |
| 61. 金居塚遺跡 | 62. 金居塚古墳群 | 63. 鄭ケ原遺跡 | 64. 川下遺跡 | 65. 下唐原居屋敷遺跡 |
| 66. 下唐原宮闕遺跡 | 67. 上唐原遺跡 | 68. 上唐原編本屋敷遺跡 | 69. 高烟遺跡 | 70. 高瀬遺跡 |
| 71. 上万田遺跡 | 72. 相原廢寺 | 73. 幌旗郎古墳群 | 74. 輻射野地道路 | 75. 上ノ原横穴墓群 |
| 76. 佐久保畠遺跡 | 77. 沖代小学校校庭遺跡 | 78. 金手遺跡 | 79. 長者屋敷遺跡 | 80. 推定官道路 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

III 調査の内容

1 和井田遺跡

(1) 遺跡の概要

和井田遺跡は、山国川西岸に沿って延びる耶馬渓台地の一脈である松尾山系の沖積台地の段丘先端、標高7m程度に立地する遺跡である。調査区は吉富町のほぼ中央、既設の県道113号線（旧国道10号）と県道226号線が交差する直江東交差点の北に位置する。南北に長い調査区は約1,200mで、全体が海に向かって緩やかに北に下り、調査区西側は大きく段落ちしている。また調査区内を横断して導水管が埋設されていたことから、これを避けて調査することとし、これより南をA調査区、北をB調査区と設定した。

調査では、弥生時代中期・後期、古墳時代初頭・前期・後期の集落跡の一部、近代の石列を検出した。遺構面は現代の整地によりほぼ平坦になっているが、B調査区北側は若干残りが良かったため、多くの遺構が確認された。またA調査区は大きく落ちておらず、周辺住民の話では大きな川と池があつたとのことである。池については一部護岸と思われる石垣を確認している。なお、現代の家屋があつたためトイレを含むカクランが多数あり、住居跡等の一部は破壊されていた。

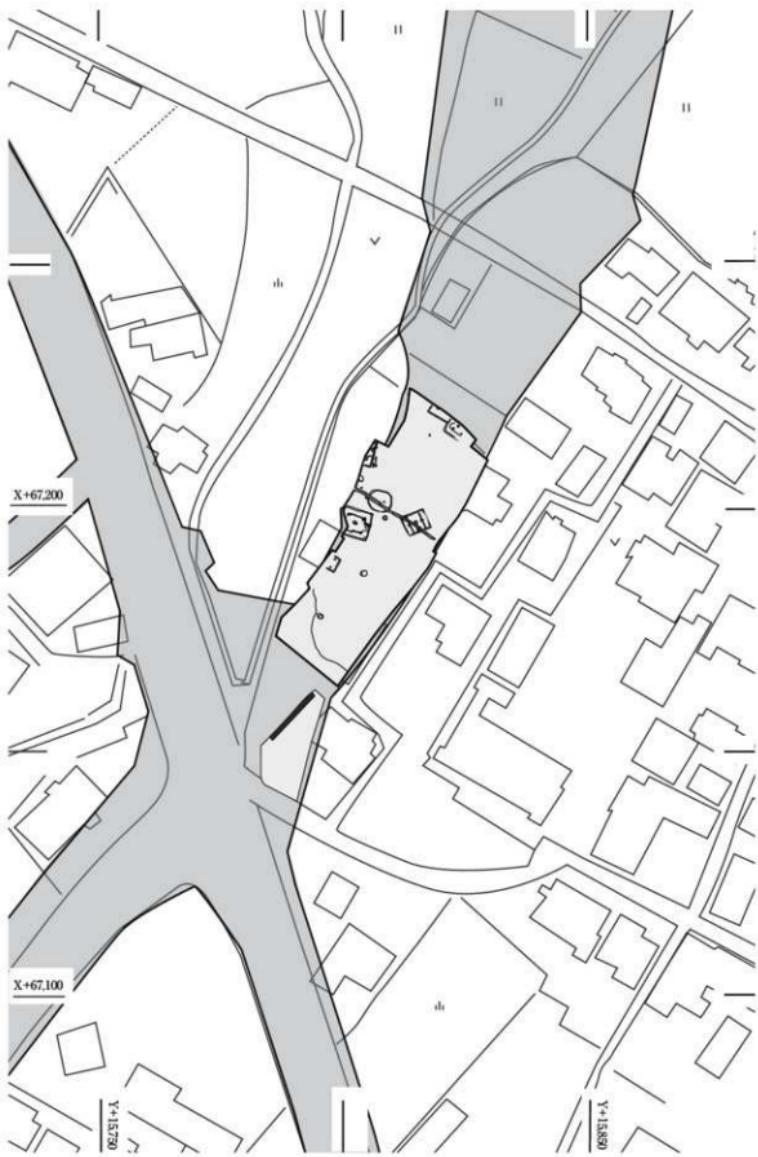
検出した主な遺構は竪穴式住居跡7棟、土坑4基、溝1条、ピット等である。

1・2・4～6号竪穴住居跡は平面方形で屋内の四辺にベッド状遺構を持ち、4本の主柱穴を有するもので、2号竪穴住居跡は古墳時代初頭、1・6号竪穴住居跡は古墳時代前期のものと考えられる。特に1号竪穴住居跡からは、住居廃絶後に投棄されたと考えられる土器や石器が大量に出土し、パンケース25箱にも及んだ。また7号竪穴住居跡は平面円形で、壁際の1カ所に屋内土坑を持ち、中央には炉跡とその脇に2本の主柱穴を有し、古墳時代初頭のものと考えられる。3号竪穴住居跡は唯一弥生時代後期のもので、主柱穴は2本、2辺にベッドを有し、中央に炉を有する。

その他土坑は弥生時代後期、古墳時代初頭、古墳時代後期のものがある。古墳時代後期の遺構は土坑のみであるが、残りが良くないことから他の遺構は削平されたと考えられる。

(2) 調査の経過

調査区は南北に長く、北側は数段に段造成されていた。平成23年10月に県土整備事務所と現地協議し、土砂置場の都合から調査は北側・南側に分けて土砂反転で調査を行うこと、北側の段造成部分は用地買収後にトレンドリーチで遺構の有無を確認することとした。この後に地元の区長と調整を行い、作業員の募集も含めて準備に取り掛かった。10月28日から重機を投入し、表土除去と遺構の検出を行った。調査区南側の排水路から南のA調査区の表土剥ぎを行ったが、池の護岸と思われる石垣が残るのみで大きく削平されていた。次にB調査区の表土剥ぎを行ったが、最南部が旧河川と搅乱により南側に大きく落ちており、北側で土坑数基と竪穴住居跡1棟、及び6世紀代の土坑を確認した（1・2号土坑）。土坑はいずれも土器を包含するものの残りが悪かった。竪穴住居跡（1号）の埋土は上層に細片の土器を含む粒度の細かい堅固な黒色土が入り、カクランの可能性も考えてベルトを設定して黒色土を最初に除去した。ここには現代の住居があったことから埋土が硬く、掘削



第3図 和田遺跡周辺地形および調査区位置図 (1/1,000)

に苦労しながら下げたところ、黒色土下から大量の土器が焼土や炭と共に出土した。この土層も堅く締まっており、反面土器は薄く脆いことから土器の検出・取り上げは困難を極めたが、結果的にパンケース 25 箱の土器類が出土した。1 号竪穴住居跡とともに、壁際で検出した方形土坑の掘削も行ったところ、こちらも住居と判明した（2 号竪穴住居跡）が、ほとんどが調査区外に伸びるが、耕作中の畑があったため、調査はできなかった。

また、B 調査区西側で遺構が確認されないことから、トレチを設定して遺構の有無を再確認した。地山近くから縄文時代のスクレイバーを 1 点検出したが、これに伴う明確な遺構やその他の遺物は確認されなかつた、調査終了後に重機による確認と土砂内の遺物確認も行つたが、明確な遺構・遺物共に認められなかつた。トレチの土層観察から、古墳時代前期以前の客土の可能性も考えられる。

12 月 20 日には A 調査区及び B 調査区南半部の調査を終了し、1 号竪穴住居跡以外を埋め戻して B 調査区北半部の重機による表土除去に移つた。ここでは住居と見られる方形遺構と円形遺構、及び溝 1 条と土坑・搅乱を確認した。平成 24 年 1 月 6 日から人力による調査を再開し、溝 1 条と竪穴住居跡 4 棟の調査を行つた。溝は住居を切つて直線的に調査区を横断していた。埋土は单一で出土遺物も混在していることから、新しい掘削と考えられた。北側の重複する 2 棟（4・5 号竪穴住居跡）は削平を受けて残りが悪く、半分が北側の段落ちで削平されていた。調査区内に収まる 3 号竪穴住居跡は一部を現代のトイレによって削平されており、この部分を外して調査を行つたところ、ベッドを持つ弥生後期の住居と判明した。6 号竪穴住居跡は調査区外に伸び、氾濫原によつてほとんどが削平されていた。一辺の長さが長く、また床面に 2 段の段差があつたため、当初住居か否か不明であったが、調査を行つたところベッドを持つ大型の住居であることを確認した。調査区外に伸びる部分は土砂崩落の危険があつたことから、拡張しての調査は断念した。円形遺構については、遺構検出時には上層に黒色土が堆積し、プランが明瞭でなく不正円形があつたことから、落ち込みや複数遺構の切り合いの可能性も考えたが、ベルトを設定して上層のピットや浅い溜り状遺構を除去したところ、円形住居であることを確認した（6 号竪穴住居跡）。

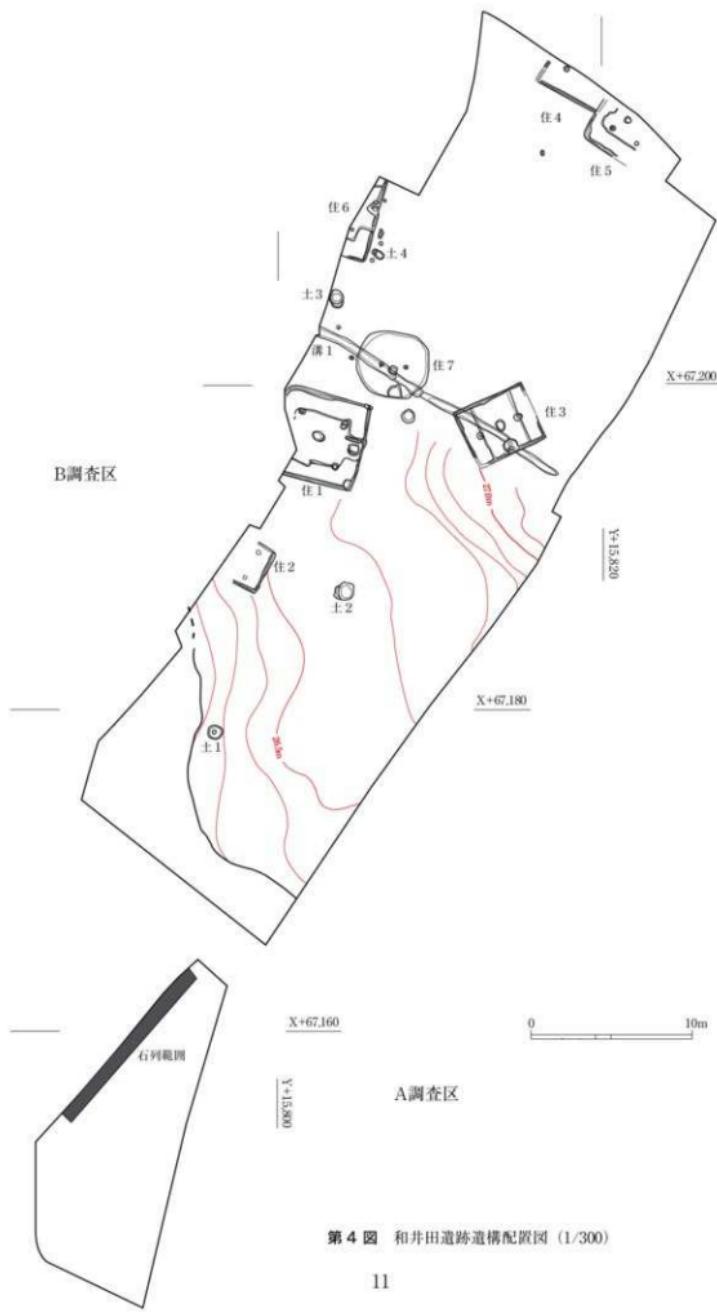
2 月 9 日にはすべての調査を終了し、埋め戻しを終了して京築県土整備事務所に引渡しを行い、調査を終了した。

（3） 検出遺構と遺物

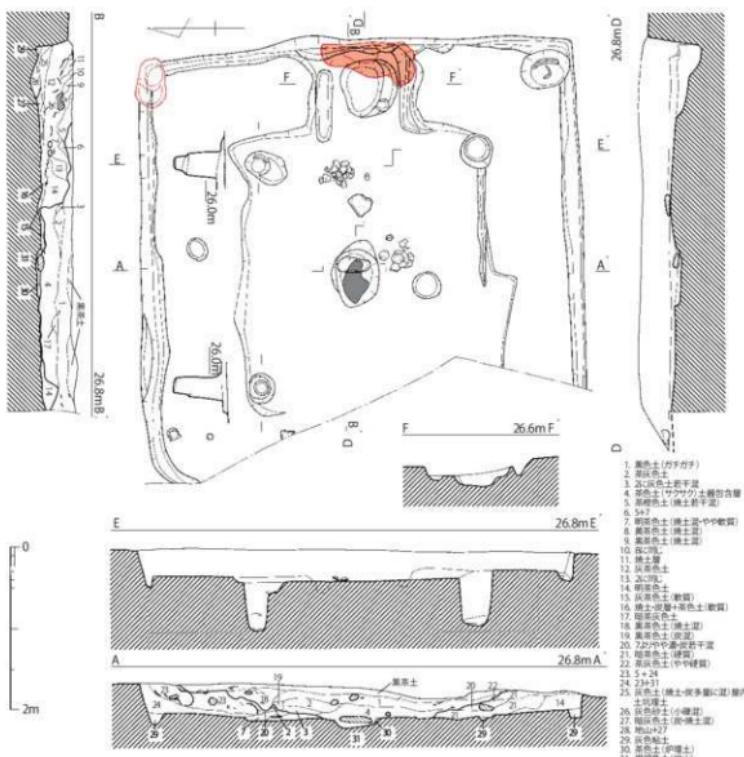
竪穴住居跡

1 号竪穴住居跡（巻頭図版 1-1、図版 3・4、第 5 図）

B 調査区中央、7 号竪穴住居跡のすぐ西南で検出した。西側の一部が調査区外に伸びるが、規模は 5.5 m × 5.5 m 以上の隅丸略方形を呈し、主軸を北北東-南南西にとる。残りの良い部分で深さが 45cm 前後と残りはあまり良くない。主柱穴は 3 基を検出し、いずれもベッドを切り込んで敷設されている。中央には炉を有し、その赤変した底部より 5cm 程浮いた状態で扁平な石が置かれていた。ベッドは四周に廻り、壁際には壁溝が廻り、ベッドの内側にも一部溝が認められる。東壁中央には屋内土坑を有し、内部にはピットが認められる。支柱やはしご等を設置した可能性が考えられよう。また、南東隅にはベッドと壁溝を切り込んで深さ 0.45m ほどのピットが掘り込まれ、埋土中から杓型木製品が出土したが、状態が悪く取り上げと同時に崩壊し、復元不可能であった。このピット上



第4図 和井田遺跡遺構配置図 (1/300)



第5図 1号竪穴住居跡実測図(1/60)

には廃絶直後の埋土があったことから、住居に伴う施設であろう。

この住居の埋土には、大量の土器が包含されていた。第5図の土層図にあるように、上層には黒色土や黒茶色土が堆積するが、これらには土器の碎片が多量に含まれ、かつ硬く締まっていることから、後世のある段階で周辺の遺構を破壊して盛土され、転圧されたと考えられる。他の遺構にも同じく上層堆積することから、調査区内一帯に盛土されたものであろう。多量の土器のほとんどは、その下の灰茶色土層(12・23層)から出土している。この土器包含層は主に住居跡北東部に集中して堆積し、北東から南西側へ傾斜している。つまり住居廃棄後に北東側から遺棄された様な状況で堆積するのである。土器はランダムに重なり、完形品も多数認められ、破片同士が幾重にも重なつて張り付いた状況のものもあった。これらの土器包含層が単純層であり、土器同士も密着していたこと、さらに土器の様相にさほど時期差が認められないことから、一括廃棄された可能性が高い。また、壁際では土器包含層の下にもわずかに堆積層が認められるが、中央部では包含層が床面近く

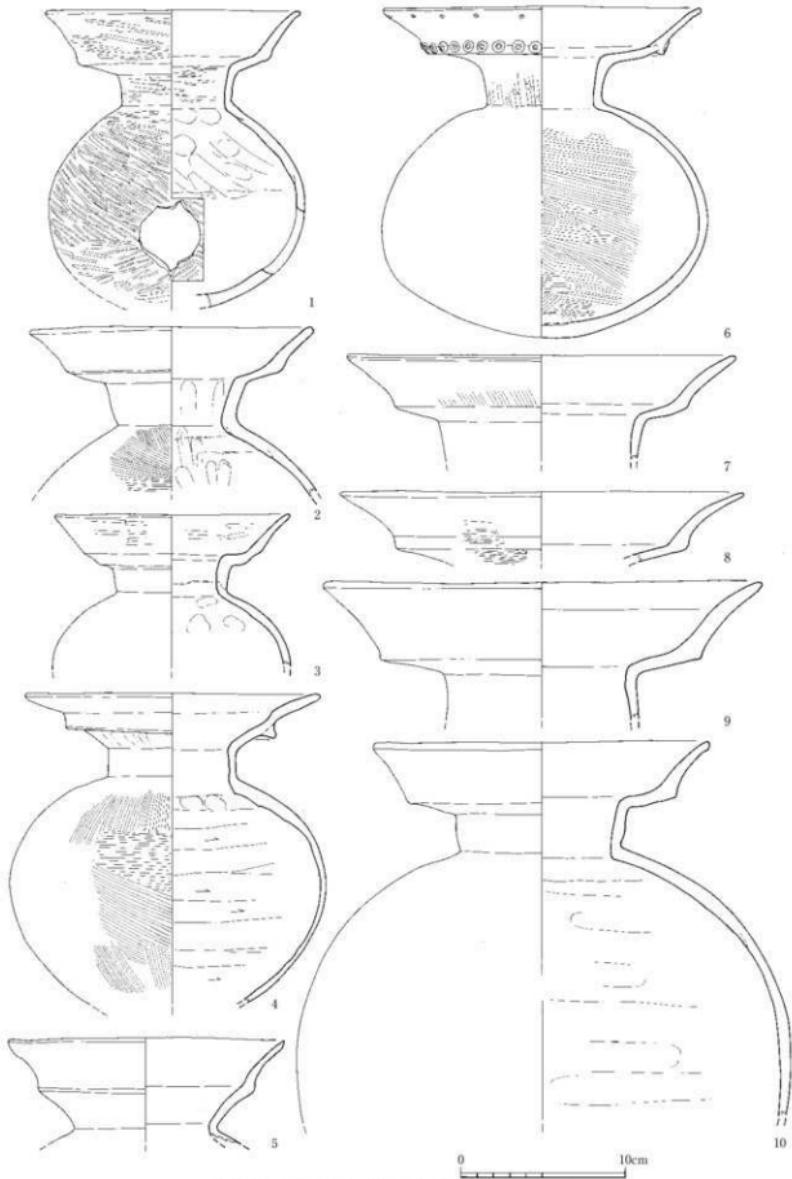
まで達していたことから、住居跡廃棄後に上部構造が撤去されてまもなく、土器廃棄行為が行われたと考えられる。さらに、包含層には炭や焼土も同時に多量に包含されていたことも注目される。

出土した土器は巻頭写真1のように住居跡の北東隅付近に密集し、そこから離れるにつれ量が減ると共に、完形に近い土器が転がったように出土している。住居の北東及び東側から投げ込まれ、北東部付近では投げ込まれ続けたため重なり合った上、後世に上部が削平されたため破損した土器が多く、投げられて転がった土器が北東部から離れた場所の床面近くから出土したと考えられる。土器類は出土場所によって器種が異なるわけでもなく、また被熱するものも多いものが、それらが偏って出土したり、床面が赤変したりという傾向は無い。焼土や炭も塊にはなるものの、分散して出土しており、いずれも分別なく投げ込まれたような状況である。当住居の廃絶後まもなく、当住居もしくは他住居の一括不要物の投棄場所になったのであろう。

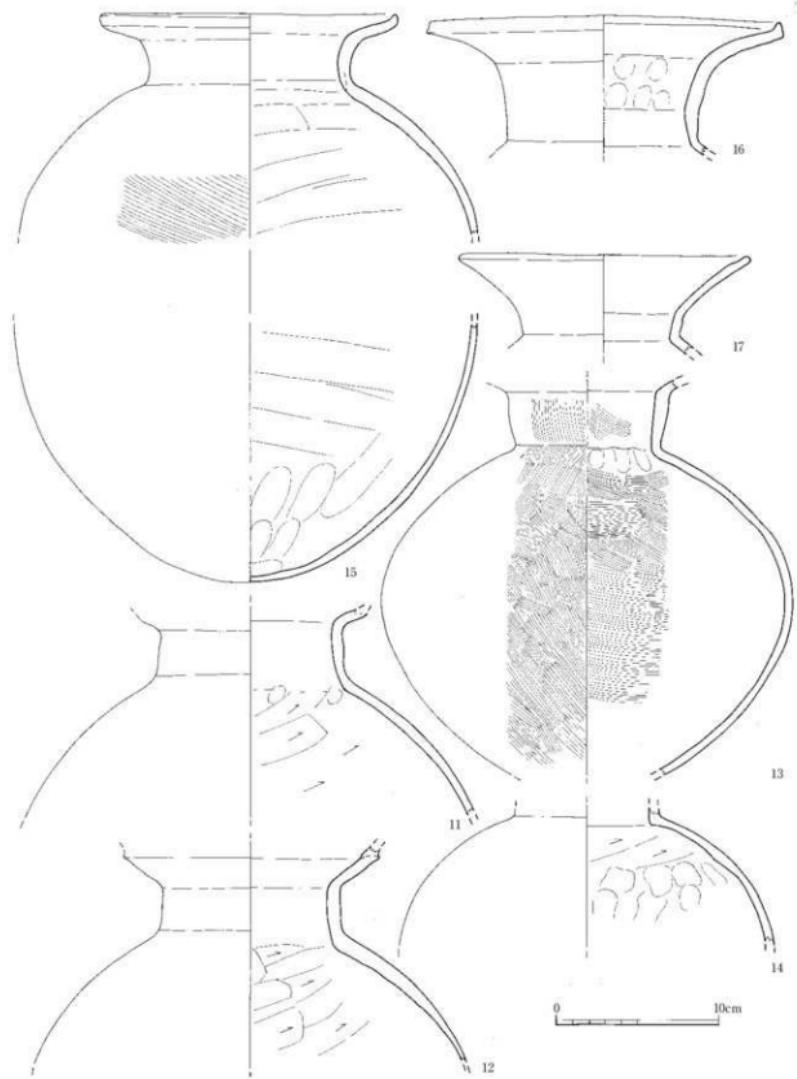
出土遺物（図版11～19、第6～23図）

現代の整地のための上位から転圧により、土器が押しつぶされて重なり合った状況であり、強く縮められた土壤からの取り上げが困難であったことから、遺存状態が悪いものが多い。また層位ごとの取り上げが困難であったこと、床直上にも廃棄された土器があったことから、住居使用時の遺物とその後の遺物が混在している可能性がある。器壁の薄さや作り、口縁の形状によって分類したが、使用時期が若干錯綜していることも考えられる。

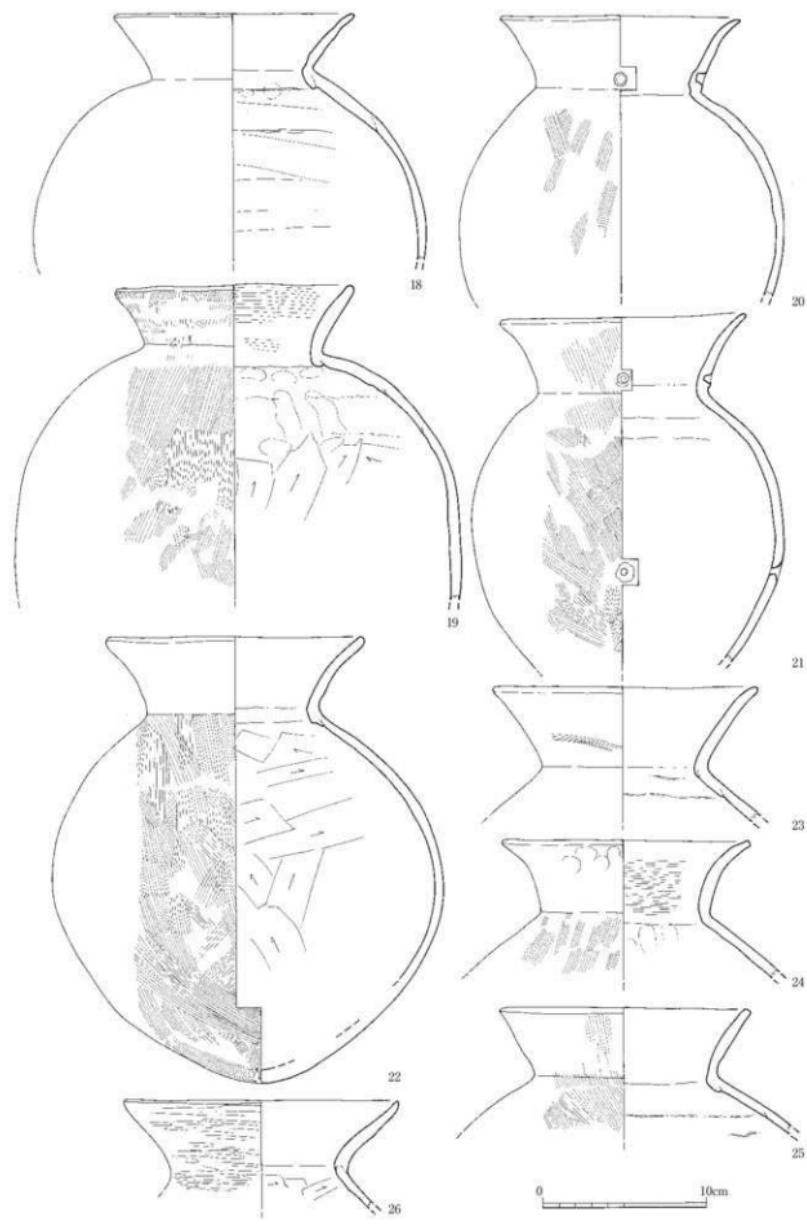
第6～10図1～47は壺。1～10は複合口縁壺で、口縁は大きく開き屈曲部の稜が強いものが多い。1は内外面に細かいランダムなミガキが認められ、内面は頸部がミガキ、体部に粘土接合痕が目立つ。中位の粘土接合痕以上はナデと指圧が強い。体部には焼成後にあいたと思われる大きな穿孔があるが、偶然の可能性も否めない。2は外側がハケ目、内面は縦位のナデツケで、剥離が激しい。3は作りが粗雑でマメツが激しく、口縁の内外面に僅かにミガキが認められる。内面頸部には接合痕があり、内面全体は指圧と粗いナデツケで調整する。4は屈曲部が凸帯状になり、外側はハケ、内面は横ナデと指圧で調整する。5は口縁があまり開かず屈曲も弱い。6は口縁部に円形浮文を貼付し、屈曲部は凸帯状に垂下する。外側はマメツが激しく頸部に縦ミガキが僅かに残る。内面は横ハケで黒色を呈する。7～9は口縁のみでマメツが激しく、8は外側の一部にミガキが残る。10は屈曲部が若干肥厚し、マメツが激しく内面に横ナデが僅かに認められる。11～14は頸部以下しか残存しないが、形状から複合口縁壺と考える。11・12・14はマメツが激しく、11・12は内面にケズりが認められる。14は内面肩部がケズり、中位は指圧が認められ黒色を呈する。13は内外面とも細かいハケ目で調整し、内底部はナデ調整する。15・16は頸部が直立するがやや外傾して口縁が大きく開き、口縁端部を引き上げる。15は接合しないが同一個体である。全体にマメツし、外側にハケ目と内面にケズり、内底にナデが認められる。16は剥離が激しいが、頸部内面に指圧痕が残る。17は頸部がわずかに直立して口縁が緩やかに開き、マメツのため調整不明。18・19は口縁部が短く胴部が張る。18は頸部の粘土接合痕を指圧で調整し、内面は横ケズリ。19は作りが粗雑で、外側は縦ハケで調整して部分的にナデ消す。内面は粘土接合痕が目立ち、指圧と横ナデで調整する。下位は縦ケズリ。20～32は口縁がやや長く外傾するもの。20・21は近似した形状で、頸部上位に貫通しない直径0.7mm前後の焼成前穿孔があり、21は対面にも浅い穿孔がある。双方とも外側は細かい縦ハケで、内面は粘土の接合痕が目立ち、マメツが激しいケズりの可能性がある。21は胴部に直径約0.3mmの焼成後穿孔がある。22は残りが良く、胴部が大きく張ってやや穿底になる。



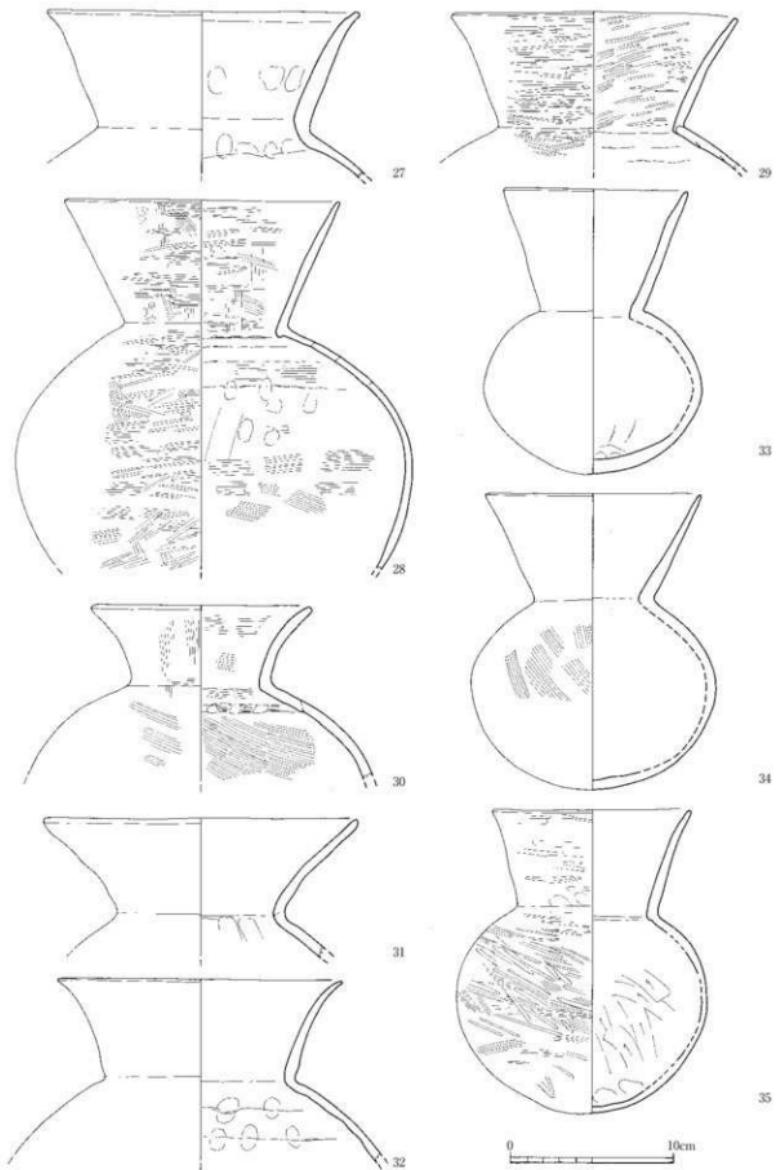
第6図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)(1/3)



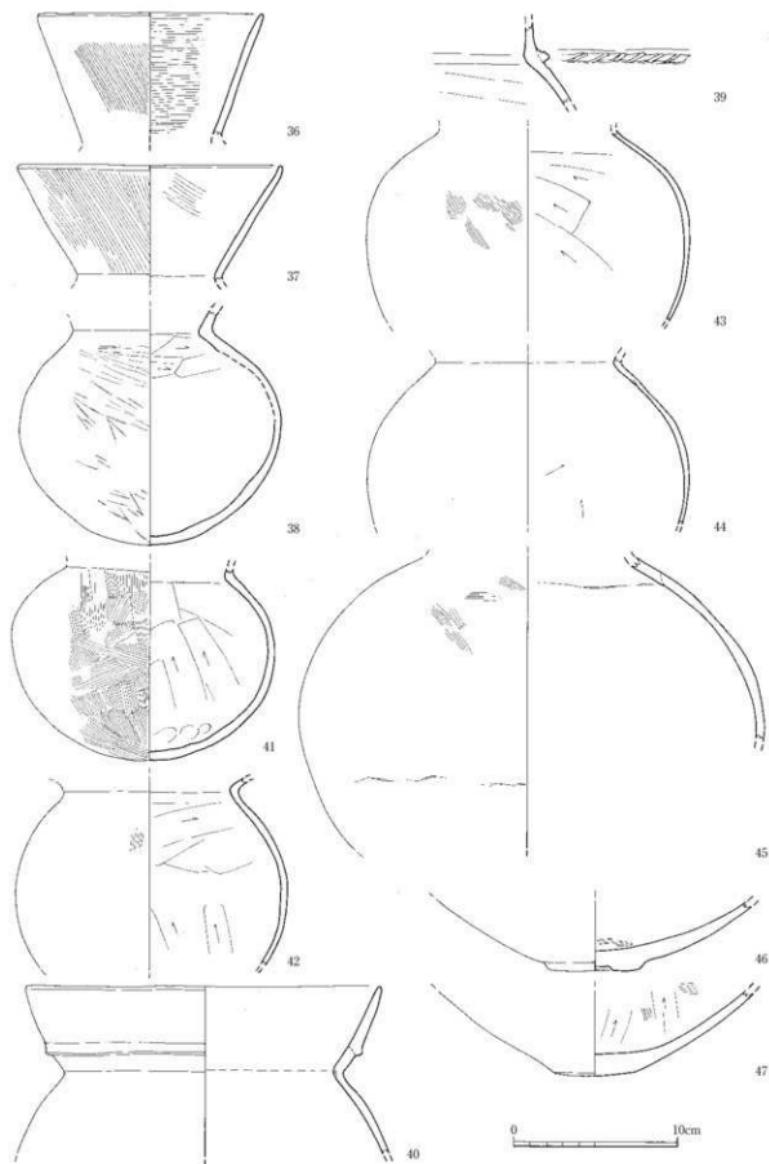
第7図 1号竖穴住居跡出土遺物実測図 (2) (1/3)



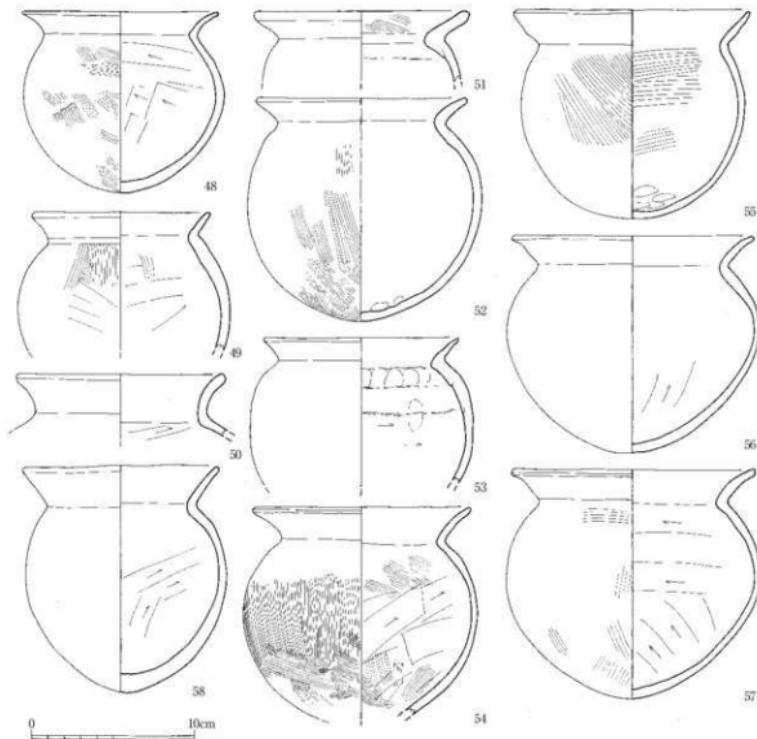
第8図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (3) (1/3)



第9図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (4) (1/3)

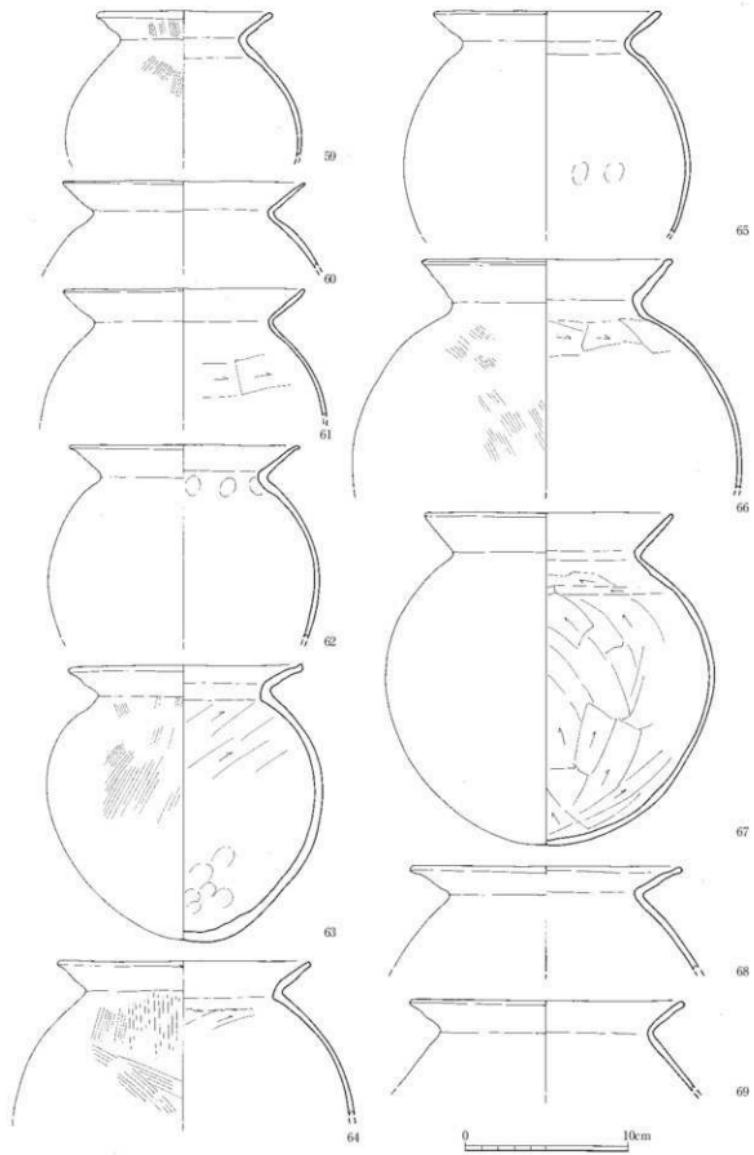


第10図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(5)(1/3)

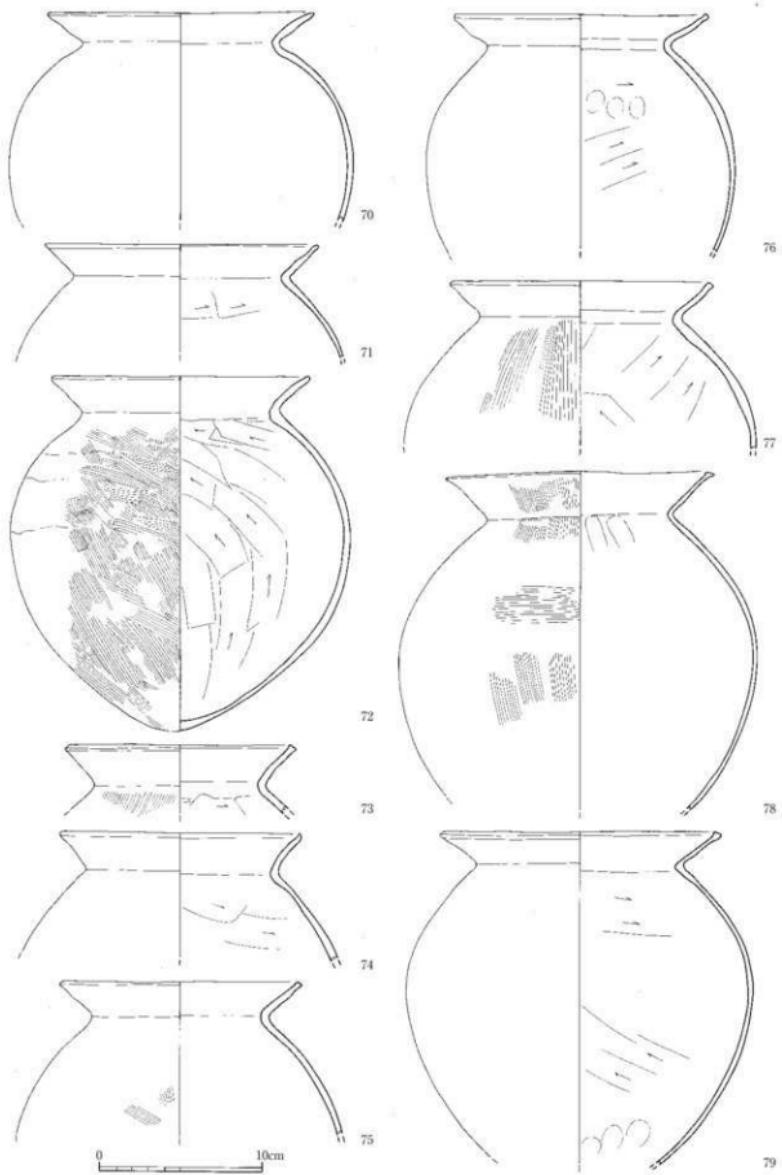


第11図 1号竪穴住居出土遺物実測図(6)(1/3)

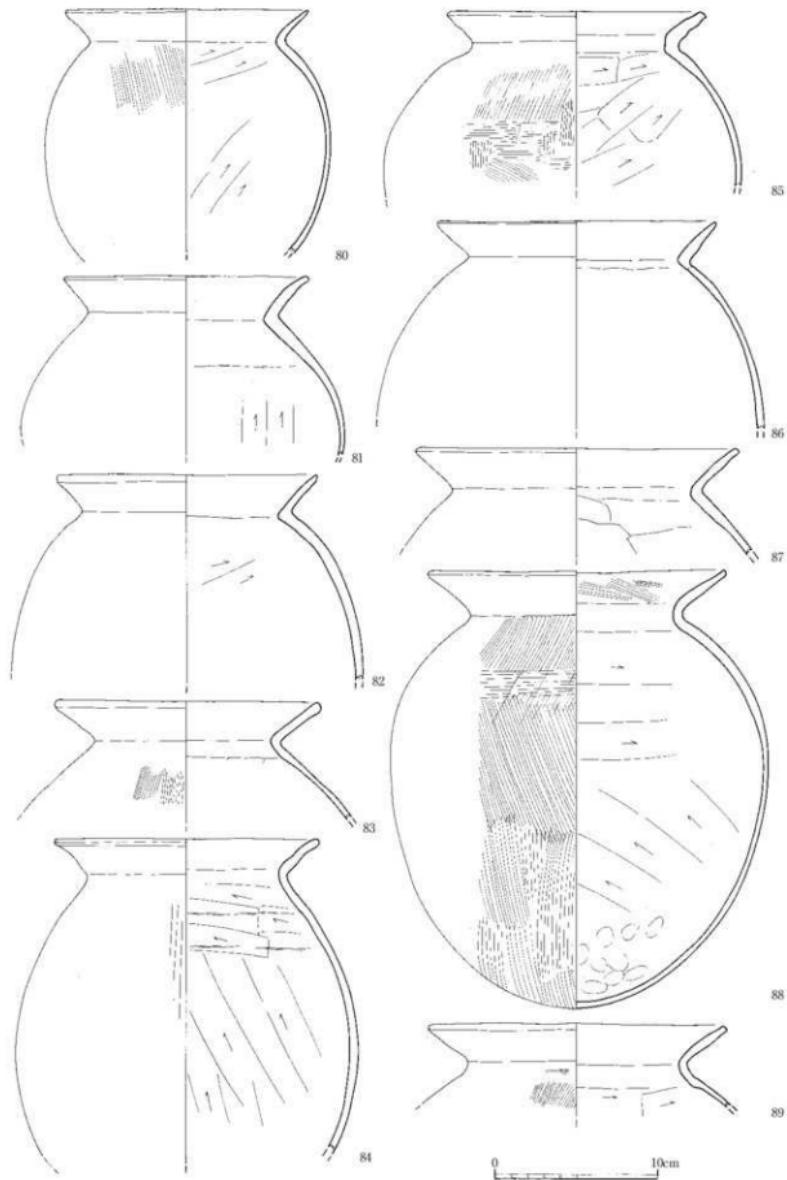
外面はハケ調整後ランダムなナデを施し、内面はケズリ。頸部は平坦面を持ち粘土接合痕がある。23～26は口縁部から頸部の破片。23～25は作りが粗雑で器壁が厚く重い。23は口縁外面の一部に工具痕があり、24・25は細かいハケ調整。内面には粘土接合痕があり、一部指圧痕が認められる。26は口縁がやや内湾し、外面はミガキ、内面はケズリで調整する。27～32は更に口縁部が長いもの。27は口縁端部が外反する。器壁が荒れるが内面に指圧痕が残る。28・29は口縁が直線的で、28は内外面ともハケ調整で外面と口縁部内面を細かいミガキで調整する。粘土接合痕には指圧痕が重なり、一部ケズリも認められる。29はミガキのみで同じく粘土接合痕が顕著である。30は作りが精緻で、内外面共にハケ調整、内面の粘土接合部は指圧で調整する。31は口縁が大きく開き、頸部内面付近に指圧痕がある。32はマメツが激しいが、内面接合痕が顕著で指圧痕が重なる。33～38は長頸壺で8割以上残存する。33はマメツが激しく、内底部に工具痕と指圧痕が残るので、胴部外面が赤変する。34もマメツが激しく、外面に僅かにハケ目が残り、内面はナデ調整。器壁の厚さに比して非常に重い。35は口縁がやや直立し、外面はハケ調整後細かい工具でランダムに粗いミガキを施し、底部はケズリ調整。内面はケズリで、底部



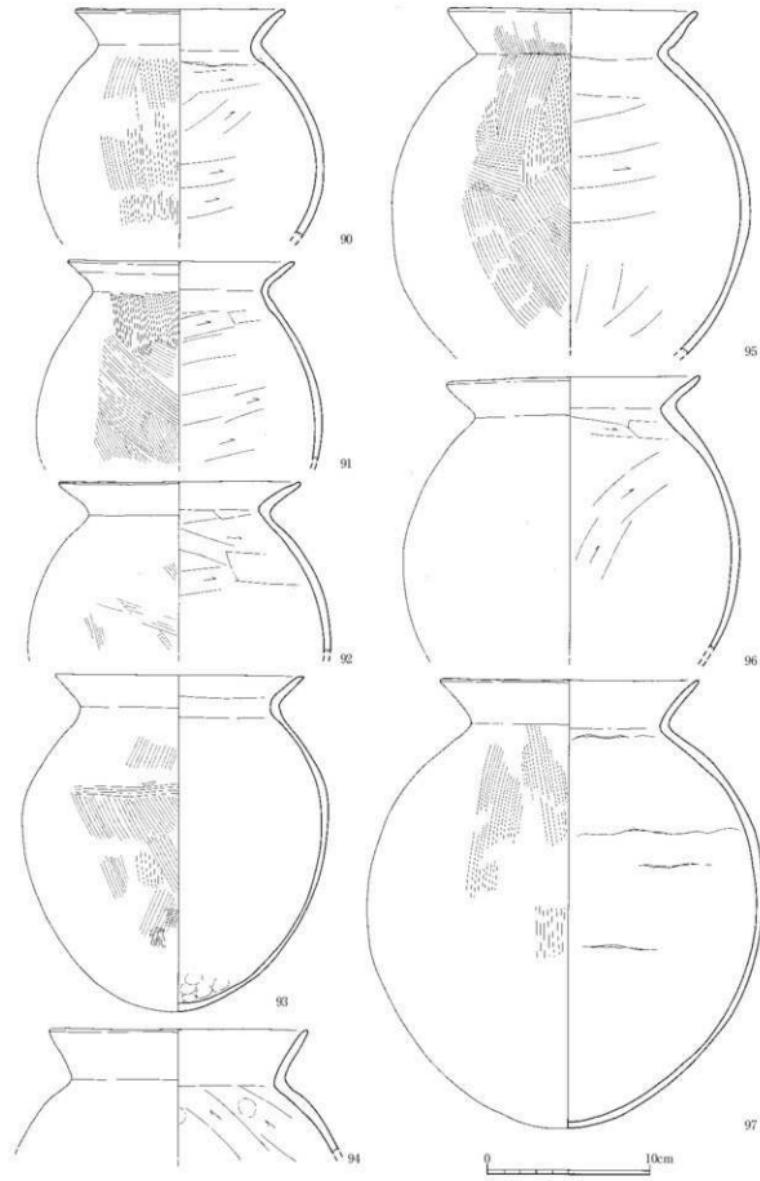
第12図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(7)(1/3)



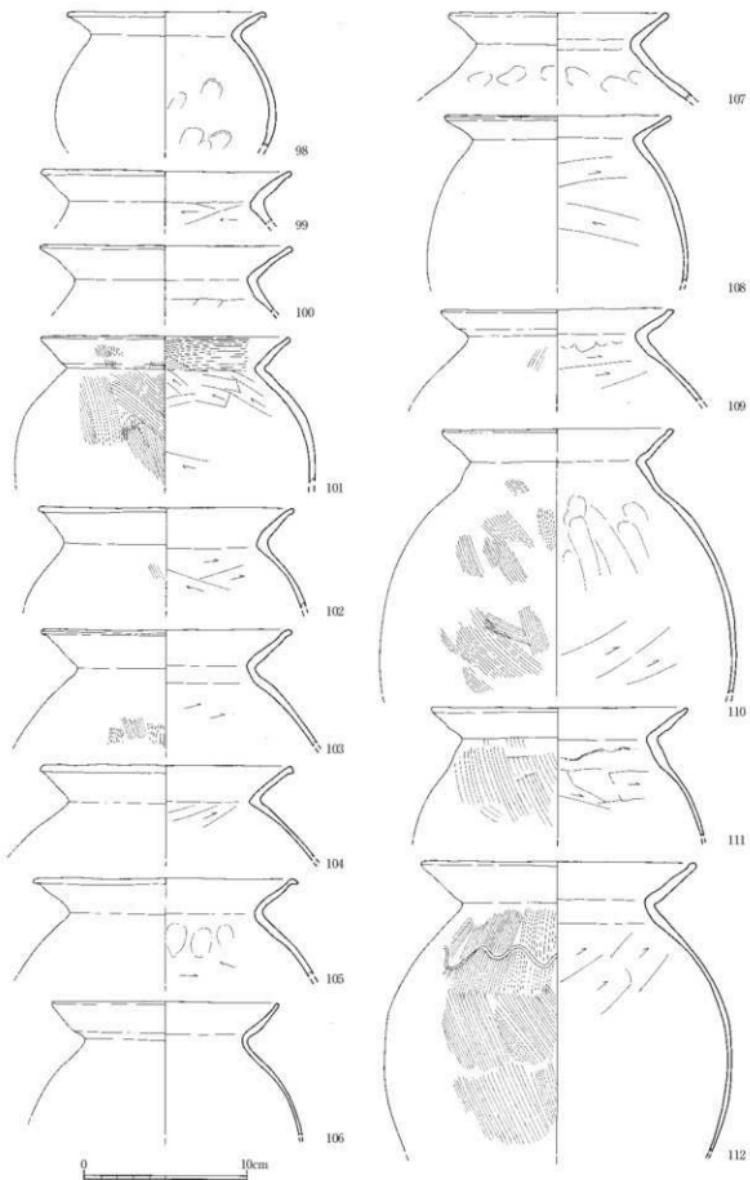
第13図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(8) (1/3)



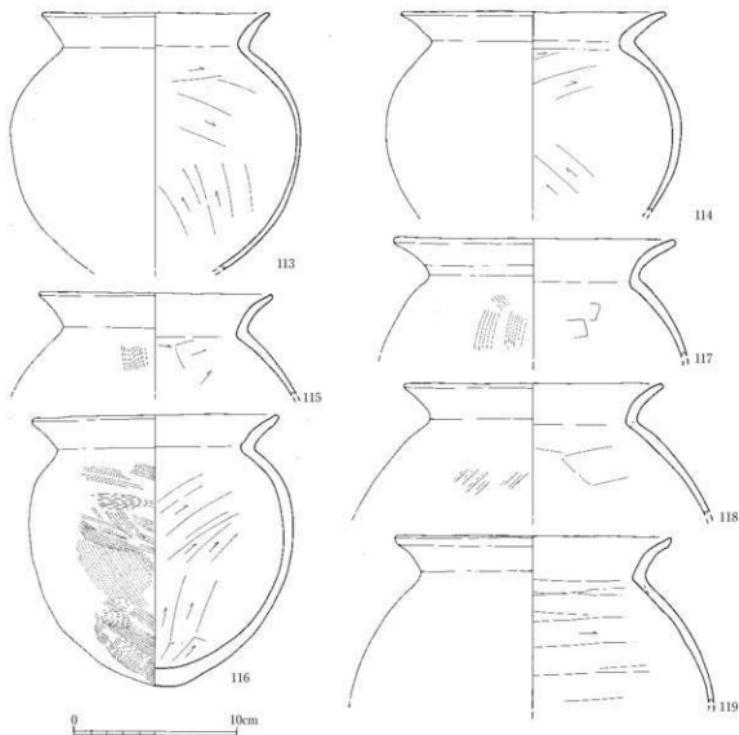
第14図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (9) (1/3)



第15図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(10) (1/3)



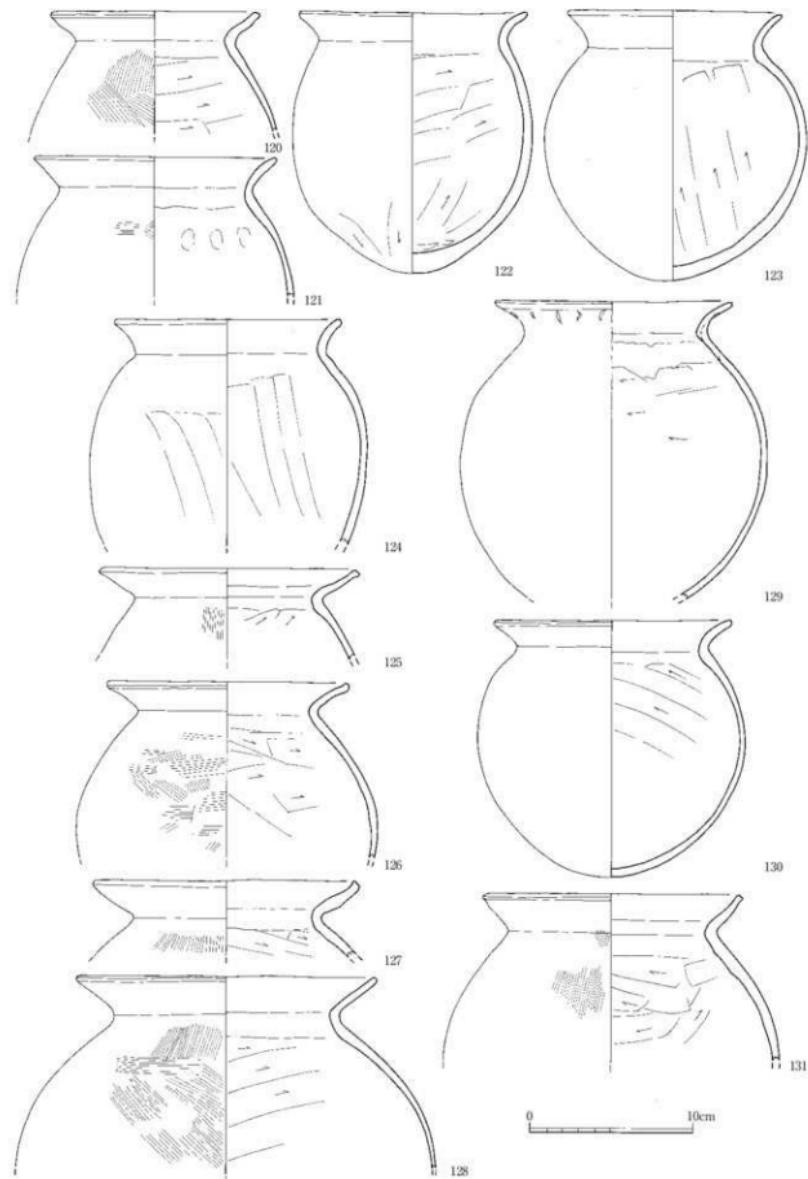
第16図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(11) (1/3)



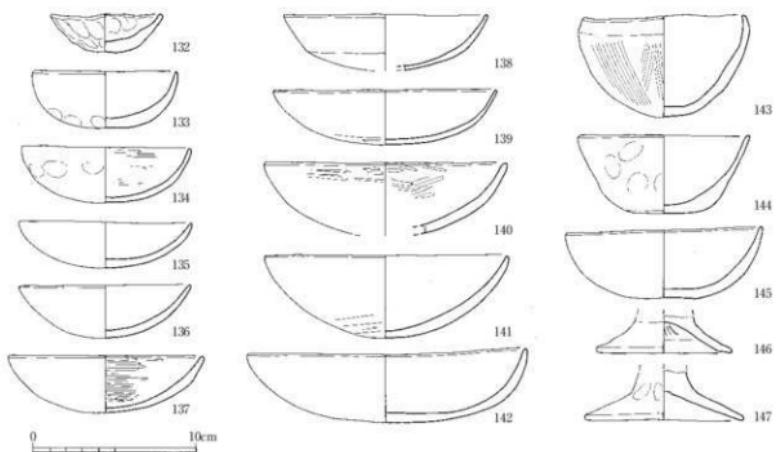
第 17 図 1 号竪穴住居跡出土遺物実測図 (12) (1/3)

に指圧痕が認められる。36・37は口縁部片。内外面ともハケ調整で、37は後にナデ消す。38は胴部のみだが形状から長頸壺と判断した。外面は細い工具による粗いミガキ、内面は頸部付近がケズリで胴部はナデ調整を施す。器壁が厚く重さがあり、外面に煤の付着が多い。39は頸部小片で凸帯を廻らせてキザミを施す。40は広口壺で、口縁は直線的に開き、凸帯を有する。41～45は大きく張る胴部片。41は器壁がやや薄く、外面をハケ、内面をケズリで調整し、内底部に指圧痕が残る。42は器壁が薄く軽いもので、口縁が強く屈曲し、内面はケズリ調整。43～45はマツメの為調整は不明瞭で、一部ハケ目やケズリ、粘土接合痕が認められる。46・47は底部片。46は蛇の目高台状で、内底部に放射状に工具痕が認められる。47は底部片でレンズ状を呈し、内面にハケ目とケズリが残る。

第 11～18 図 48～131 は甕。48～57 は小型で口縁径と器高の比率差が小さいもの。48 は頸部の屈曲が強く外面はハケ調整、内面はケズリ調整。50～56 は器壁が厚く、野暮ったい作りである。51 はやや長胴タイプか、口縁が開き頸部が厚い。52 は外面にハケ目が、内底部に指圧痕が残る。53 は口縁が短く内面には粘土接合痕と指圧痕が顕著である。54 は口縁がやや長く外湾し、外面は縦ハケで後に底部付近を横ハケ、内面はケズリ調整で底部にハケ目が残る。外底部の残存部は二次

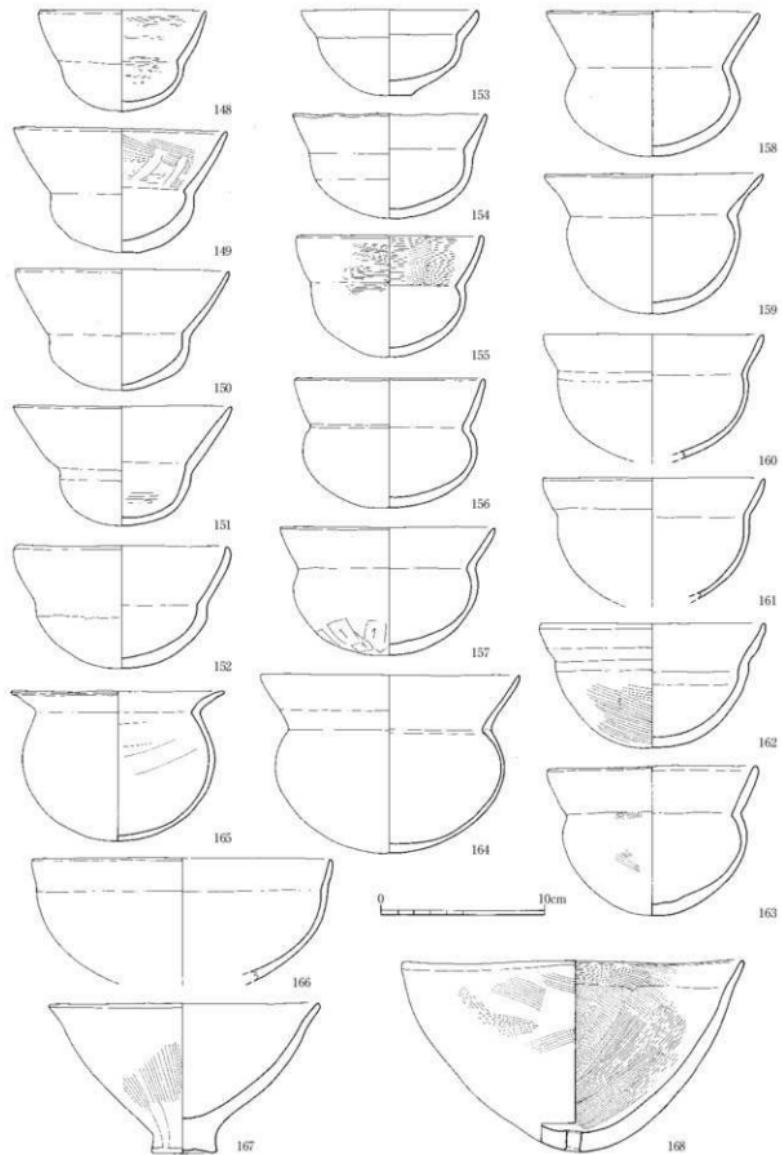


第18図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図 (13) (1/3)

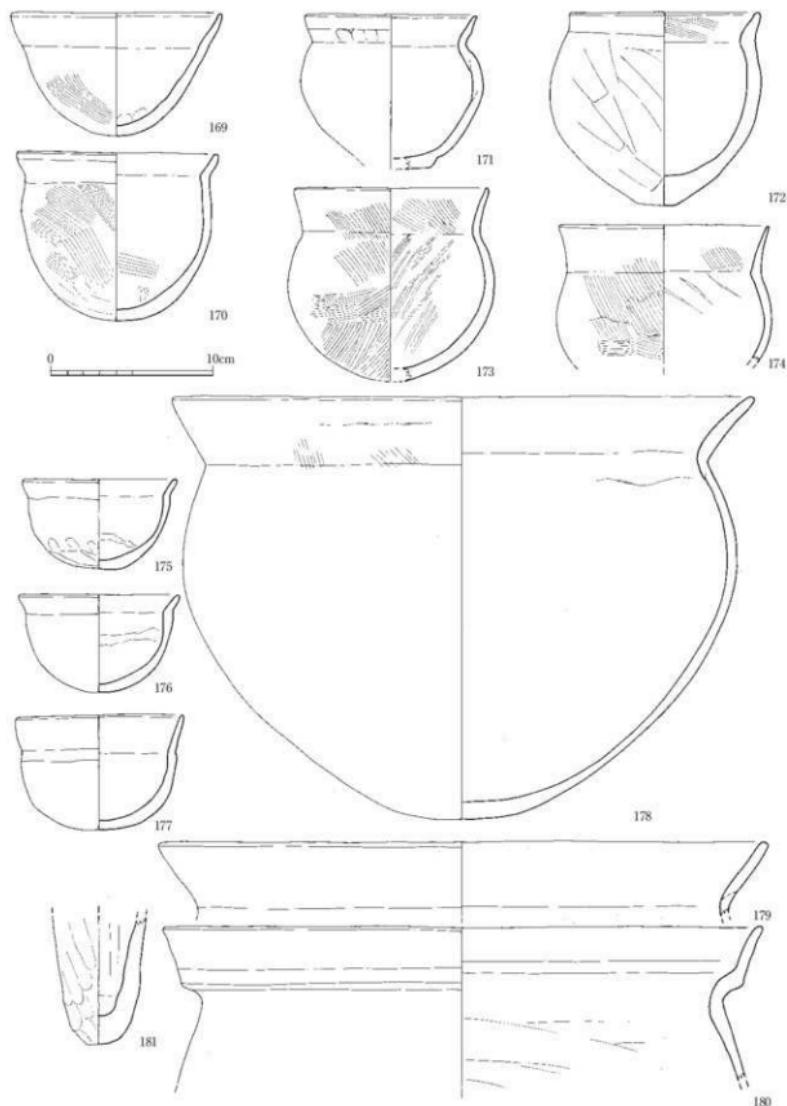


第19図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(14)(1/3)

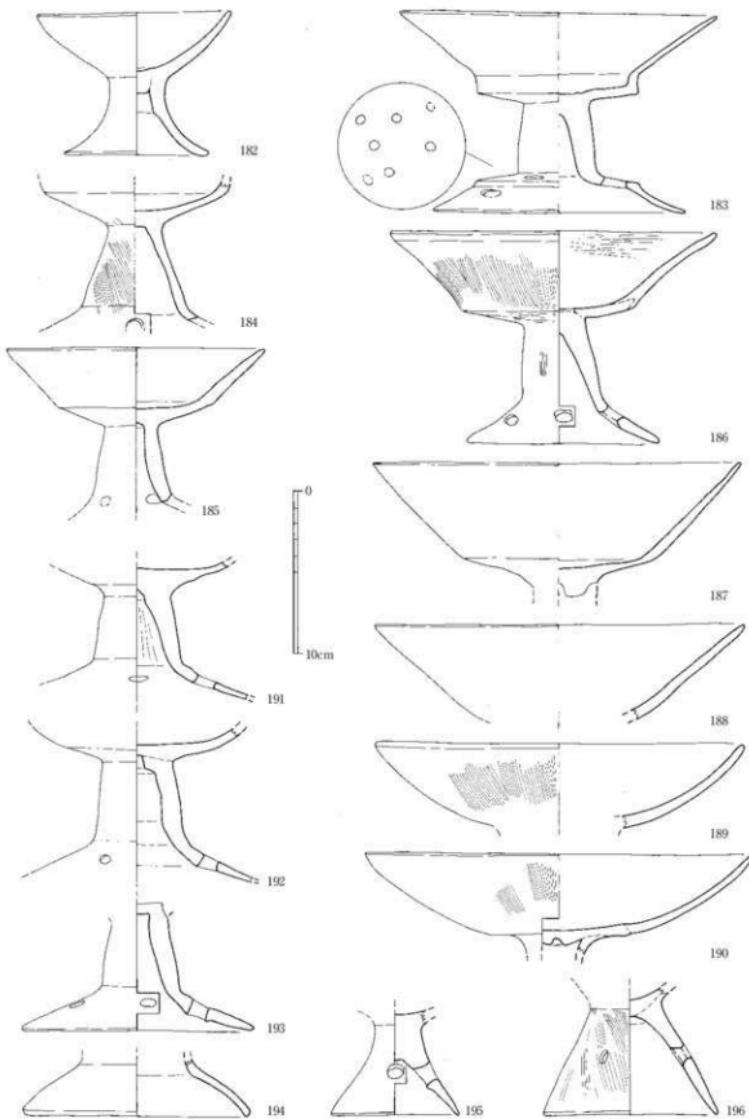
被熱により剥離が激しい。55は丸底で内外面ともハケ調整、内底部に指圧痕が残る。56・57はマメツが激しく、57は外面にハケ目が、内面にケズリが僅かに認められる。58は胴部がやや長く小型のもので、底部は穿底状で厚く、内面はケズリを施す。59～79は器壁が薄く頸部の屈曲が強く胴部が張るもの。59～62は口縁部が薄く直線的に開く。いずれもマメツが激しいがハケ目やケズリ、指圧痕が残る。62はやや厚手で野暮ったい。63は胴部が小さめで全体的に作りが精緻で極めて軽い。外面にハケ目、内面にケズリと内底部に指圧痕が認められる。64は頸部の屈曲が強く、外面にハケ目が、内面にケズリが残る。65は内面の一部に指圧痕があり、66は外面にハケ目、内面にケズリが残る。67は器壁の荒れが著しいが内面にはケズリが明瞭に残る。68・69はマメツが激しく調整不明。70～72は口縁端部を玉縁状もしくは上に引き上げるもので、60・71はマメツが激しい。72は残りが良く、口縁端部はわずかにつまみ上げ底部はやや尖る。外面は細かいハケ、内面はケズリで調整するが、外面に粘土接合部分にヒビが入る。外底部と口端の一部に煤が付着する。73～77は頸部の屈曲が緩やかで口縁部は内湾する。マメツが激しいが、外面にはハケ目が、内面にはケズリが残るものが多い。74は口縁端部をつまみ上げ、73・75・77は平坦面を持つ。78・79は器形が近似し、口縁端部を内側に引き出して上部に平坦面を作る。器壁が極めて薄く極めて軽い。78の外面にハケ目が、79の内面にケズリが僅かに残り、頸部や内底部には指圧痕が認められる。他の土器と明らかに異なり、搬入品の可能性が高い。78は全体が被熱する。80～89も頸部の屈曲が明瞭だが、器壁は特に薄くない。全体にマメツが激しい。80は外面をハケ、内面をケズリで調整し、外面は二次被熱を受ける。81は内面に粘土接合痕があり、ケズリも残る。82～84は内面にケズリが残り、84は粘土接合痕が顕著で内面が黒変する。85は口縁部が短く肥厚し、外面は縦横のハケ目、内面はケズリが残る。86・87は内面がケズリか。88は底部に向かって器壁が薄くなり、外面は縦ハケ、内面はケズリで調整し、底部に指圧痕が認められ、外面上位に一条の横ハケが認められる。89



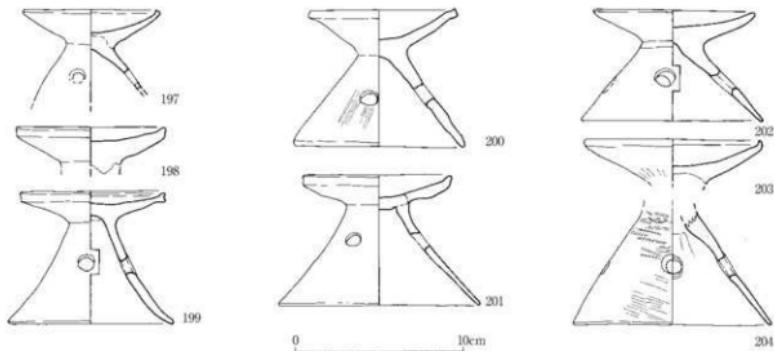
第20図 1号竖穴住居跡出土遺物実測図(15) (1/3)



第21図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(16)(1/3)



第22図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(17)(1/3)



第23図 1号竪穴住居跡出土遺物実測図(18)(1/3)

は内面のケズリが強い。90～97は頸部の屈曲がやや緩やかで口縁が直線的に開くもの。90はやや厚く野暮ったい。外面はハケ、内面はケズリで調整し、頸部は肥厚して粘土接合痕が残る。91・92も外面はハケ、内面はケズリで調整する。93は外面継ハケ後に、胴部上位を波状の横ハケで装飾する。内底部は指圧痕がある。94・96は内面のケズリと指圧痕が僅かに残る。95は口縁部中位が肥厚し、外面がハケ、内面はケズリで調整する。97は外面のハケ目しか残らず、内面には粘土接合痕が顯著に残る。また、胴部上位に液体痕が残るが、埋没後のものかもしれない。98～105は口縁端部を外に引き出すもの。98は小型で端部を折り曲げ、内面はナデで一部指圧痕が認められる。99・100は小片で内面がケズリ。101は外面がハケ調整、内面がケズリ後ナデ調整で、焼成が良好で堅敏である。102～104は外面にハケ目、内面にケズリが僅かに残る。104は端部を強く外側につまみ出す。外面はナデ、内面には指圧痕が残る。106～112は口縁が僅かに内湾し、なで肩で胴部最大形が下がるもので、総体的に野暮ったいものが多い。106は器壁が薄く、口縁が大きく内湾する。107は内外面とも横ナデで、一部内外面の指圧痕が対応するようになり、接合痕を押圧したものか。108・109は内面にケズリが残り、外面は二次被熱により茶変する。110・111は器壁の凹凸が激しい。外面はハケ調整で、内面はナデ、またはケズリで調整し、一部指圧痕が残る。112は口縁端部が僅かに玉縁状を呈し、外面は丁寧なハケ調整で胴部上位に一条の波状文を有し、内面はケズリ調整。113～119は口縁が外湾するもので、頸部の屈曲も弱い。外面はハケ、内面はケズリで調整するものがほとんどで、119は内面の粘土接合痕が顯著である。113・114・116・117は胴部径が小さい。114は二次被熱を受け、116は器壁が厚く重さがあり、118は内外面に煤やコゲが付着する。120～131は頸部の屈曲が弱く、全体に作りが粗く野暮ったい。120は外面がハケ、内面がケズリ調整で、121は内面に指圧痕しか残らない。122は底部が極めて厚く、内面と外底部にケズリが残り内面は黒変する。123は頸部の屈曲が他に比して明瞭だが厚ぼったい。124は内外面ともケズリで、器壁が厚く重い。125は外に、126・127は上に口縁端部をつまみ出し、外面はハケ、内面はケズリ調整。128も調整は同じ。129はやや長胴でマツツが激しいが、口縁部外面に継長の工具痕が文様のように廻る。内面はケズリだが粘土接合痕が顯著である。130は胴部が丸く口縁が強く屈曲し、内面に

ケズリが認められるが、器壁は厚く重い。131も同じく厚く重く、野暮ったい土器で、外面をハケ、内面ケズリで調整する。

第19図132～147は坏。132は手捏ねの小型品。133・134は丸底で深く、133は底部のみ厚く、外底部は指圧で整える。134は外面に指圧痕と内面にミガキが残る。135～142は丸底で浅いもの。全体にマツツが激しいが、137の内面と140の内外面口縁付近にミガキが残る。141の外底部はケズリか。143～145は平底のもの。143は深く、口縁端部が内湾する。外面はハケ、内面はナデで調整する。144は外面に指圧痕が僅かに残る。145はナデ調整か。146・147は脚付坏の脚部。内外面ナデ調整で、一部指圧痕や工具痕が残る。

第20図148～162は小型丸底鉢。148～152は口縁部が長く大きく開き、胴部が小さいもの。148は外面がナデ調整、内面は細かいミガキで調整し、精緻で器形が美しい。149は外口縁部外面はナデ、内面は口縁部がハケ調整後部分的にナデ調整、胴部はナデ調整。150はマツツが激しく、151は内面に僅かにミガキが認められるが、器壁が厚く野暮ったい。152は胴部が浅く大きめで、外面がナデ調整。153～157は口縁がやや短く内湾する。153は底部がやや平底で、154は口縁の作りが粗雑で内面はナデ調整。155は外面をミガキ、内面口縁部をハケ、胴部をナデで調整する。156・157は内外面ともにナデ調整で、157は外底部をケズリで調整するが器壁は厚い。158～161はマツツが激しく調整不明。162は頸部の屈曲が弱く、器壁も厚く野暮ったく、外底部はハケ調整、その他はナデ調整と見られる。163～179は鉢。163は内面がナデ調整、外面は僅かにハケ目が残る。164は頸部に粘土接合痕が顕著に残る。器壁が薄く、内面中位より上はナデ調整で、他は調整不明。165は口縁が短く強く外湾する。内面にケズリが認められ、外底部に煤が付着する。166は屈曲が僅かにあり口縁が内湾する。167～169は体部が大きく広がるもの。167は口縁が外反し、底部が厚い。外面にハケ目が残る。168は体部から直接的に開くもので、頸部に僅かに屈曲が認められる。底部には焼成前穿孔がある。内外面ともハケ調整で、特に内底部はハケ目が放射状に施される。169も弱く屈曲し、外面にハケ目が、内面に指圧痕が僅かに残る。170～174は壺型で、口縁の屈曲が緩やかである。170は丸底で器壁が厚く、外面はハケ調整、内面はハケ後ナデ調整し、黒灰色に変色する。171は平底で底部が厚く段を有し、外面の器壁は凹凸が多い。全体的に作りが粗雑で器壁が厚く重い。頸部外面には工具痕が残る。172～174は頸部が緩いくの字に屈曲して内面に稜を持つ。172は底部が厚く平底で、外面はケズリ、内面は口縁部がハケ調整、胴部はナデ調整する。173・174は外面がハケ調整、内面は工具によるナデで、174は工具痕が顕著に残る。175～177は小型品で、丸底で同じく頸部が緩いくの字に屈曲する。175は全体に横ナデだが外底部はケズリ、その上に指圧痕が残る。176・177はマツツが激しく内面のナデ調整以外は不明である。175・176は内面には液体状の痕跡があるが廃棄後のものか。178は大型の鉢で、口縁は強くくの字に屈曲し、胴部上位が大きく張って底部はレンズ状を呈する。外面頸部に僅かにハケ目が残り、内面はケズリと思われる。一部粘土接合痕が残る。179は口縁が緩やかにくの字に屈曲し、粘土接合痕が顕著である。180は口縁が屈曲して直立する。壺かも知れない。胴部内面はケズリ、その他は横ナデを施す。181は小型で長胴の手捏ね土器胴部片。埠塙状を呈し、器壁が厚く外面は縦指ナデツケで底部付近は強いナデツケ、内面は緩ナデで調整する。蛸壺かもしれない。

第22図182～196は高坏。182は小型で坏部は緩やかに内湾して立ち上がり、内底部に黒斑が認められる。重ね焼きの痕跡か。183・184は坏底部が強く屈曲して段をなすもの。183は屈曲部が強い稜

を持ち、口縁は直線的に大きく開く。脚部も強い段を持ち、配置の不揃いな穿孔が2重に廻る。マメツが激しく脚部外面のナデと坏部内底部の工具痕以外は調整不明だが、全体にシャープな作りで胎土も精錬されている。184は底部の屈曲は緩やかと思われる。脚部には4力所の穿孔を有し、外面のハケ目以外はマメツの為調整不明。185～187は坏底部から体部の境が強く屈曲するもの。185は脚部がやや厚く、屈曲部は低い凸帶状に稜をなす。脚部には穿孔が4

力所あったと思われる。186は坏部外面と脚部がハケ調整、内面と外底部にはミガキが認められ、屈曲部は接合痕が顕著である。脚部は4力所に穿孔がある。187は坏部片でマメツのため調整不明。188も屈曲するタイプかも知れない。189・190は坏底部が丸底で器高の低いもの。外面にハケ目が残る。191～196は底部～脚部のみの破片。194以外は脚部に穿孔を持ち、196は3力所、191・193・195は4力所であったと思われる。195・196は脚部のみであり、高杯か器台のいずれかになろう。全体がナデ調整で胎土は精緻である。

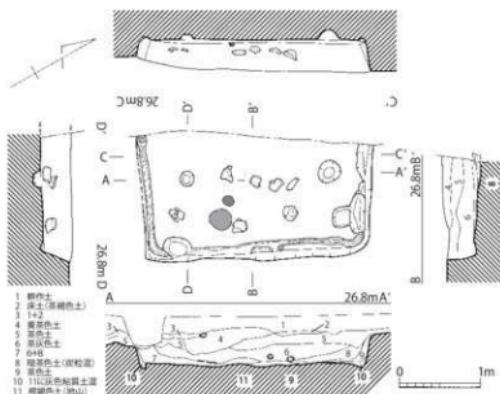
第23図197～204は小型精製器台。197・199・200は器壁が薄く、口縁端部をつまみ上げる。198と203は口縁端部がマメツし、形状に疑問が残る。全体的にマメツが激しいが、200は外面に僅かにハケ目が認められ、203はナデ調整、204は外面に細かい工具による粗いミガキが認められる。脚部の穿孔は201が3力所、197・199・200・202・204は4力所と思われる。

2号竪穴住居跡（図版5、第24図）

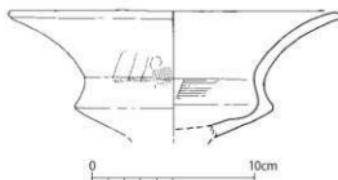
B調査区南西の壁際で検出し、全体の半分が調査区外に延びるが、略方形を呈すると考えられる。検出できた西壁の長さは2.8mと小型で、主軸を北東～南西にとる。深さは40cmほど残存する。主柱穴は2本を確認し、壁際には壁溝が廻る。調査区内で炉は検出できなかった。上層には黒茶色土が水平堆積し、床面付近では一部赤変する部分や炭を含む埋土を確認した。上層は故意に埋められたことが考えられ、中層には自然堆積、下層の炭の存在は他の住居に近似する。

出土遺物（図版20、第25図）

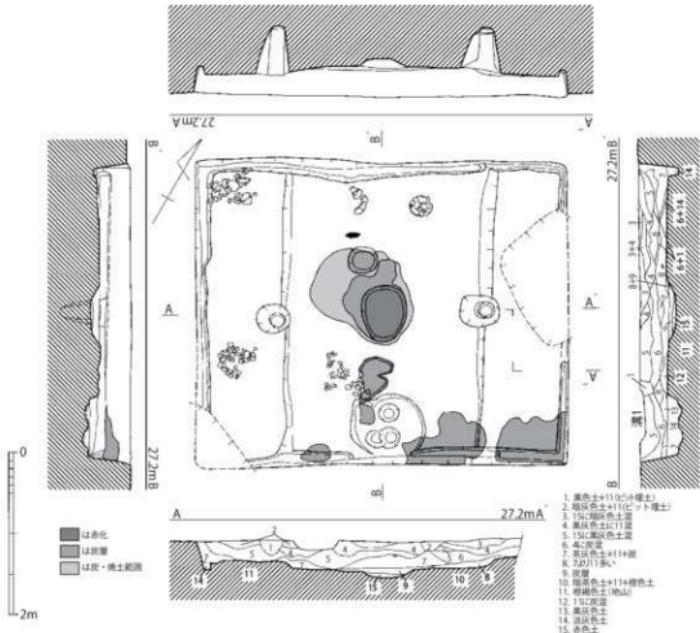
床面よりやや上位で出土した高坏の坏部片。口縁



第24図 2号竪穴住居跡実測図(1/60)



第25図 2号竪穴住居跡出土遺物
実測図(1/3)

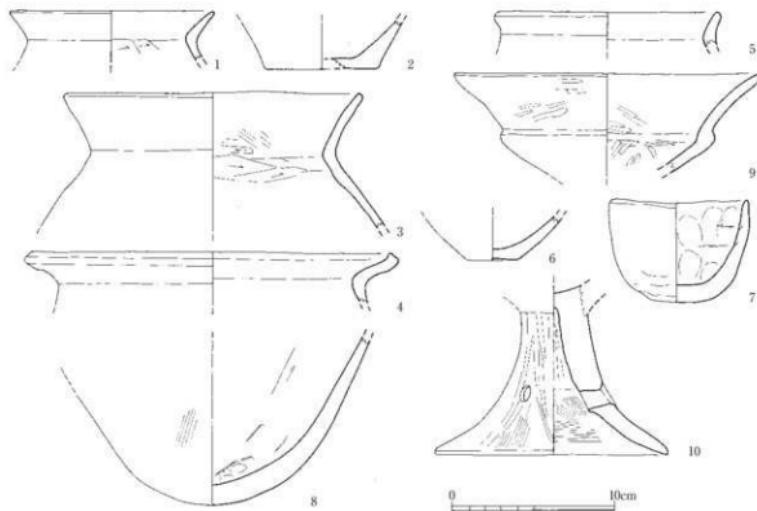


第26図 3号竖穴住居跡実測図 (1/60)

が大きく開き、体部が強く屈曲して窓部が広がって稜を持つ。底部から脚部を欠損し、マメツが激しいが外面にはハケ目と工具痕が、内面にはハケ目が一部に残る。他に外面ハケ調整の球形の胴部片が出土している。

3号竖穴住居跡（図版6、第26図）

B調査区中央やや北よりで検出した。7号竖穴住居跡の東に位置し、1号溝に切られる。長軸4.55m、短軸3.8m前後の長方形を呈し、主軸を北西—南東とする。東西にベッドを有し、2本の主柱穴がベッドに切り込む。主柱穴は床面から約50cmの深さで、直径15cm前後の柱と考えられる。中央には炉があり、床面が赤変化すると共に、周囲も薄く被熱して薄く赤変し、さらにその周囲には炭や焼土が掻き出されたように広がっていた。南壁際には90cm×75cmの楕円形の屋内土坑があり、内部にはピットが2基南北に並んで検出された。支柱やはしごの痕跡の可能性がある。対面の北壁際には直径約30cmの浅いピットがあるが、壁溝を切るため新しいものの可能性が高い。壁溝は四周を廻り、屋内土坑部分のみ設置しない。床面やベッド上に土器片が散乱し、住居廃棄後そのまま放置されたものであろう。埋土の上位は自然堆積と思われるが、床面付近の特に壁際には焼土や炭、これらを多量に含む茶灰色土が堆積しており、故意に埋められた可能性がある。この状況は1・6・7号竖穴住居跡の状況にも



第27図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)

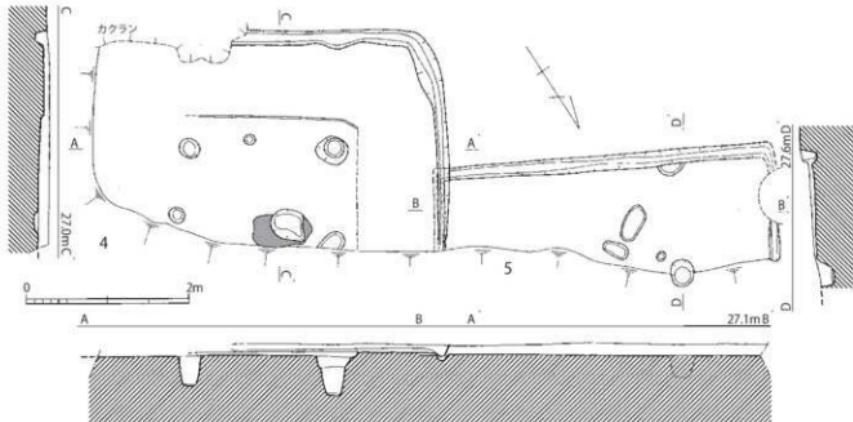
近似する。

出土遺物 (図版20、第27図)

1～5は甕。1は小型のもので、口縁がくの字に屈曲し、内面はケズリ調整する。2は平底の底部片で、内面が被熱する。3は口縁が長くくの字に屈曲し、頸部内面にケズリによる平坦面を有する。内面は黒変し、口縁部に工具痕が認められる。屋内土坑上焼土層出土。4は口縁端部が屈曲する小片で、壁溝出土。5は口縁部小片で、壁際の焼土からの出土。鉢になるかもしれない。6は平底の底部片で、小型の壺であろう。屋内土坑出土。7は手捏ねの鉢で、緩い平底で器壁の荒れが激しい。外面に工具痕が、内面に指圧痕と粘土接合痕が認められる。床直上出土。8は丸底の底部片で、外面一部に僅かにハケ目が認められる。内面はケズリで工具痕が残り、底部は指圧痕が残る。西側ベッド上出土。9・10は高坏。9は坏部片で屈曲部を有し、口縁は大きく外湾しながら開く。器壁は厚く、マツツが激しいが、内外面にミガキらしい痕跡が認められる。西側ベッド上出土。10は脚部片で、外面はハケ調整後ミガキ、内面にも一部ハケが認められる。穿孔は3カ所と思われる。床直上出土。

4号竪穴住居跡 (図版6、第28図)

B調査区北端で検出し、5号竪穴住居跡を切る。北半部が削平され、東西4.3m以上、南北2.5m以上で、主軸を北東-南西にとる方形を呈すると考えられる。深さは最も残りの良い部分でも7cmほどで、東と北の端部は床の硬化面しか残存しない。南と東にベッドと壁溝を確認し、主柱穴は南側の2基を確認したのみである。柱穴は床面から35～45cmの深さで、直径15cm前後の柱と考えられる。中央には炉と思われる赤変した硬化面と凹みが認められる。住居の埋土は地山の流れ込み



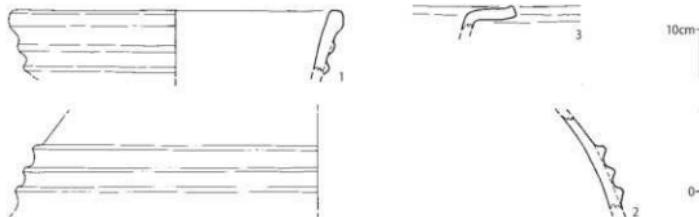
第28図 4・5号竪穴住居跡実測図(1/60)

と思われる黄褐色土で、柱穴と壁溝は暗灰色土である。出土遺物も混入の可能性が高い。
出土遺物(図版20、第29図)

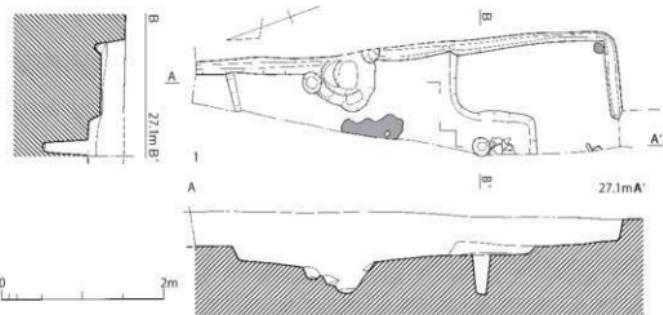
1は上下とも欠くが壺の一部か。2条の凸帯を有する。但し、擬口縁の可能性もあり、その場合は天地逆で頸部片となることも考えられる。2は壺胴部小片で3条の凸帯を有する。5号竪穴住居跡のもの可能性もある。3は口縁が平坦に屈曲する甕で、一部赤変する。

5号竪穴住居跡(図版7、第28図)

B調査区北端で検出し、4号竪穴住居跡に切られる。北側がほとんど削平され、東西4.25m、南北1.5m以上で主軸を北東—南西にとる。深さは残りの良い部分で5cmほどで、南側は床の硬化面しか残存しない。東西南に壁溝を確認し、主柱穴は1基を確認した。柱穴は床面から約15cmほどの深さで、直径15cm前後の柱と考えられる。埋土は住居の埋土は地山の流れ込みと思われる黄褐色土で、柱穴と壁溝は暗灰色土である。出土遺物は小片のため図化できず、土器器としか認識できない。



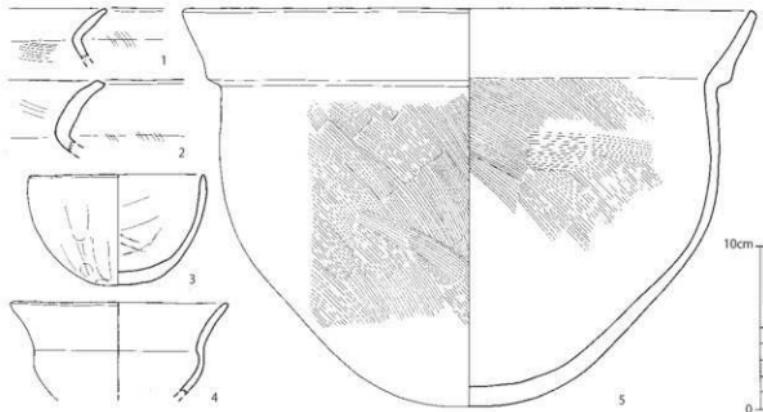
第29図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図(1/3)



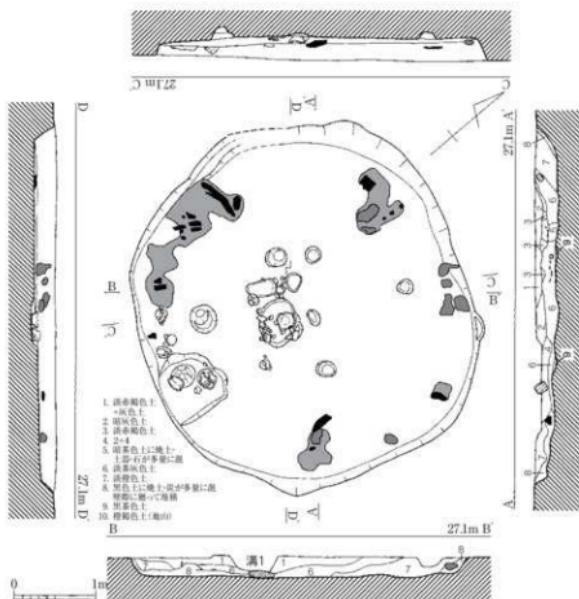
第30図 6号竖穴住居跡実測図 (1/60)

6号竖穴住居跡 (図版7、第30図)

B調査区北西の調査区壁際で検出した。ほとんどが調査区外に伸びる。南北は5.1m以上で屋内土坑やベッドから反転すると7m前後に復元でき、主軸を北東—南西に主軸をとる。南北東にベッドを確認し、壁溝が巡る。ベッドは床面に基盤土に茶灰色土が若干混入した土を積む。側壁中央には屋内土坑を確認し、中には3号住居と同様ピットがあり、土器のほか石包丁も出土した。屋内土坑の西側、中央に近い部分の床面には焼土・炭が薄く堆積する。炉にしては東に寄りすぎで、炉からの焼き出しか、他住居と同じように廐棄後の埋土かは不明である。主柱穴は南東で1基を確認し、床面からの深さは約45cm、直径10cm前後の柱と考えられる。埋土は上層に堅固な黒色土が堆積していたが、中層以下は茶灰色土と暗灰色土が中心で、ベッドの上や床面付近には各所に焼土や炭が堆積していた。この状況は1・3・7号竖穴住居跡と近似している。柱穴と壁溝の埋土は淡灰色土で、焼土はその上に乗っていた。



第31図 6号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)



第32図 7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

7号竪穴住居跡 (図版7・8、第32図)

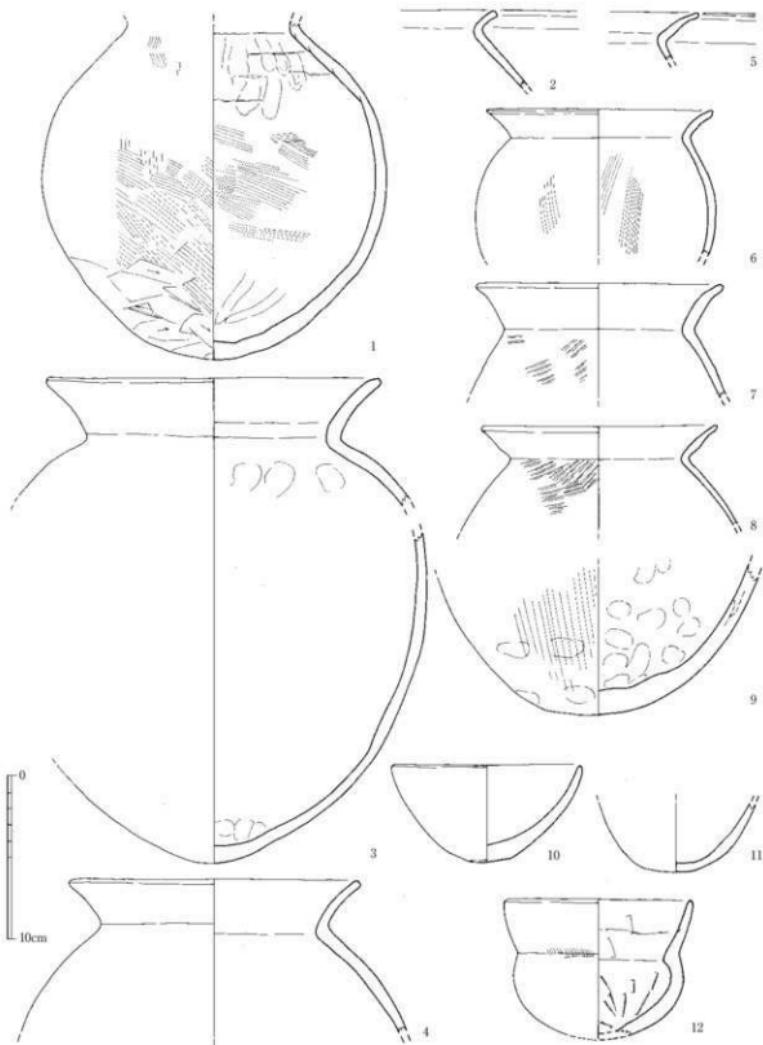
調査区北部中央、3号竪穴住居跡の西で検出した。長軸4.4m、短軸4.2mの楕円形を呈する住居である。深さは良いところでも30cm以下と残りが悪い。中央に炉と考えられる窪みがあり、長軸約60cm、短軸約50cmの楕円系を呈し、硬化面や赤変は認められない。柱穴は2基検出し、掘方はほぼ残らず柱は10cm前後と考えられる。埋土は自然堆積で、床面に炭化材があり、炭や焼土塊も多いが、大きな材は認められない。住居の廃棄時に、使える材を撤去してから不用材のみ焼却した可能性が高い。

出土遺物 (図版20・21、第33・34図)

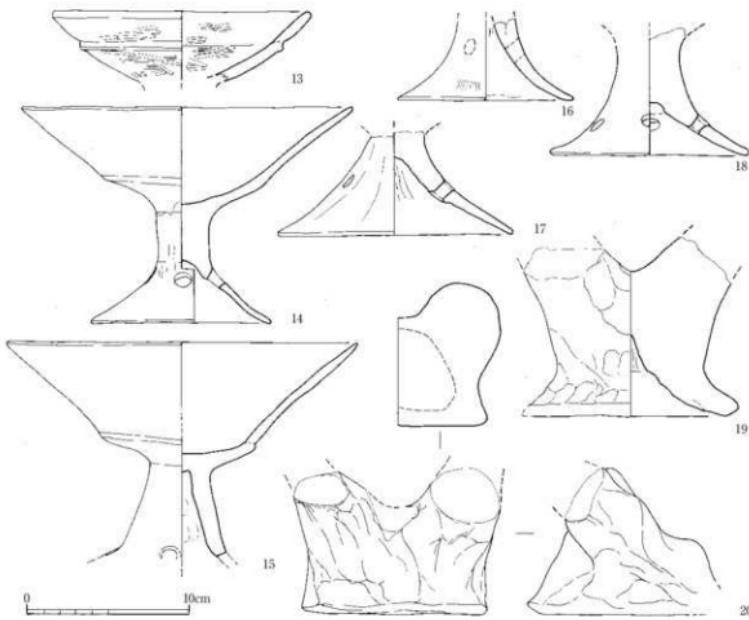
1は壺胴部で、器壁が厚く作りもやや粗雑である。外面はハケ調整で底部を粗いケズリで調整する。内上面位は粘土接合痕が顕著で、これを縦ナデツケで調整するが粗い。中位はハケ状の工具による横ナデ、底部は縦ナデ調整する。2は口縁が短く強くくの字に屈曲する。3～8は壺。3は頸部の屈曲が強く胴部は上位が張る。マメツが激しいが、内面頸部と底部に指圧痕が残る。4はマメツが激しく調整不明。5は口縁端部を玉縁状に作る。6は内外面にハケ目が残り、内面はその後ナデ調整する。外面は一部赤変する。8は外面にタタキが認められ、口縁端部がやや肥厚する。9は底部片で、作りがやや粗雑である。内外面とも指圧痕が顕著で凹凸が激しい。外面はその後粗いハケ調整を施す。器壁も厚く重い。10～12は鉢。10は単純口縁のもので、器壁が厚く口縁が大きく開く。内面に黒斑が

出土遺物 (図版20、第31図)

1・2は壺口縁部小片。くの字に屈曲し、外側に僅かにハケ目が残る。3～5は鉢。3は単純口縁の丸底のもので、外面はナデツケ調整、内面はナデ調整で、底部に工具痕が残る。4は屈曲口縁の鉢で、丸底のもの。屈曲は緩やかで器壁が薄い。5は大型で口縁が帯状に肥厚するものだが、帯の幅は各所で異なりやや粗雑に作る。内外面ともハケ調整で、外面は半分が黒変する。底部は平底気味で、器壁が厚い。



第33図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1) (1/3)



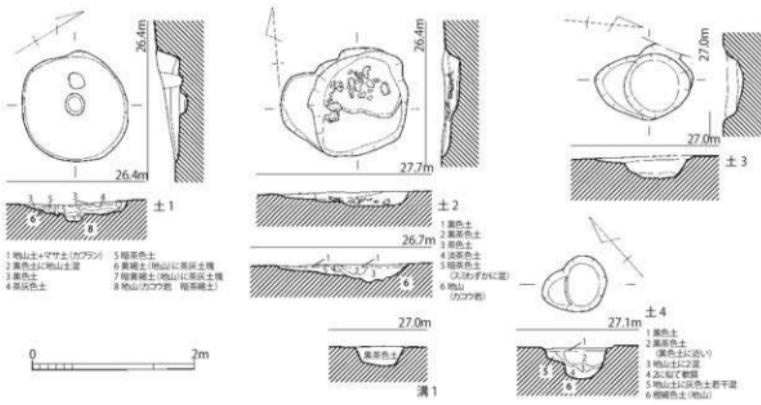
第34図 7号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)(1/3)

ある。11は底部のみの破片だが、単純口縁のものと思われる。12は屈曲口縁のもので、外面は頸部にハケ目が残り、内面は粘土接合痕と工具痕が顕著である。外面は赤変する。13～17は高坏。13は小型で坏部が浅く、外面に凸帯状の緩い屈曲部を持つ。内外面とも粗いミガキ調整で、各所にその前工程のハケ目が残る。口縁端部はマメツの可能性がある。14・15は口縁がやや外湾しながら大きく開き、15は坏底部付近の粘土接合部に僅かな段を有する。マメツのため調整は不明で、脚部の穿孔はいずれも4カ所、14の脚部端は欠損の可能性があり、15は外面が赤変する。16～18は脚部片。いずれも穿孔があり、16は3カ所、17・18は4カ所にある。16は外面に僅かにハケ目が残り、16・18は二次被熱する。19・20は二股の手捏ねの支脚。19は下位内部が空洞で、器壁の凹凸が激しい。全体に被熱する。20は内部が充填されているが、粘土の接合が粗雑で、接合部で剥離するため接合方がわかる。空洞の外側を作り、内部を粘土塊で充填する方法である。全体がナデ調整で、被熱して欠損が激しい。

土坑

1号土坑(図版8、第35図)

B調査区南西部で検出した土坑で、削平により西側はほとんど残存しない。直径1.3m 前後の円形を呈し、残りの良い西側では深さ27cmを測る。底部中央に直径26cm、深さ約10cmのピットがある。



第35図 1～4号土坑実測図 1号溝断面図実測図 (1/60)

埋土は緩やかな水平堆積で、自然堆積と思われる。

出土遺物（図版21、第36図）

1・2は須恵器で、器壁が薄い。1は蓋で屈曲部に凸帯状の段を有し、天井部はヘラケズリを施す。2は壺身で、口縁端部が若干外反し、底部はヘラケズリを施す。3は土師器の壺。内外面ともマツツで調整は不明、外面が二次被熱する。4は棒状の脚部片と思われる。全体をナデ調整し、断面は橢円形を呈する。暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。

2号土坑（図版9、第35図）

B調査区南側中央で検出した土坑である。長軸約150cm、短軸約130cmの不整隋円形を呈し、東に浅いテラスを有する。北側が一段低くなり、その中層を中心に土器片が集中して出土した。埋土は黒色土と茶色土が混在するが、分層は困難で区別は明確ではない。

出土遺物（第36図5）

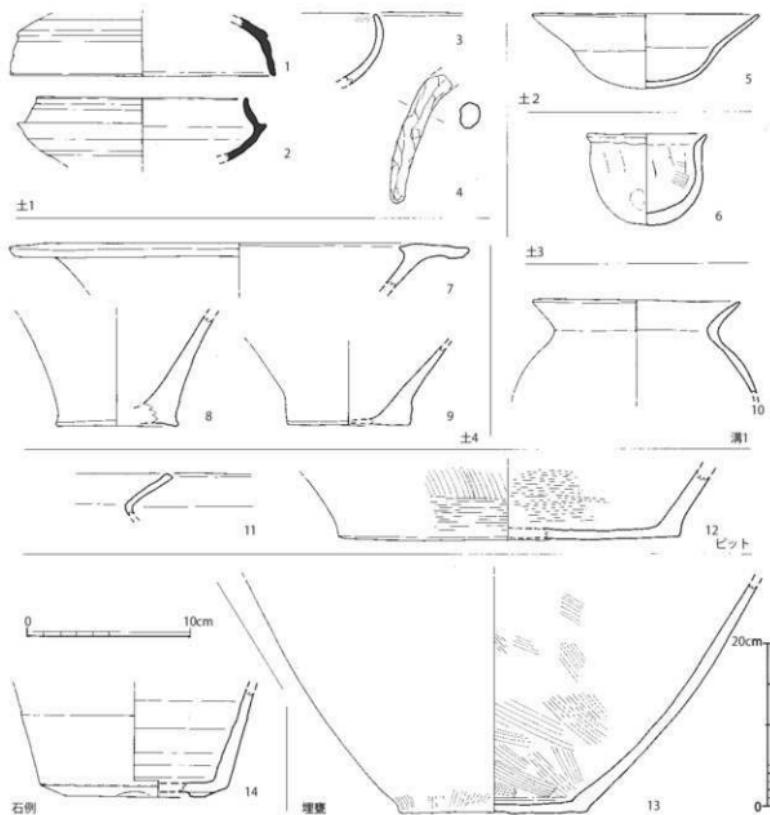
5は土師器の屈曲口縁の鉢で、口縁は大きく開き屈曲が弱い。体部の容量は小さく、器壁が薄いがマツツの為調整不明。

3号土坑（図版9、第35図）

B調査区北側、調査区壁際で検出した。直径約80cmの不整円形を呈し、南側に浅いテラスを有する。底部も凹凸が多く、土坑が落ち込みか不明な形状である。深さは25cm前後残存し、埋土は灰色土の単層で、内部からは弥生土器のみが出土している。

出土遺物（図版21、第36図6）

6は小型の鉢で、口縁端部が短く外反する。器壁は薄いが底部は厚く、外面をナデと指圧で調整し、内面にはハケ目状の工具痕が残る。



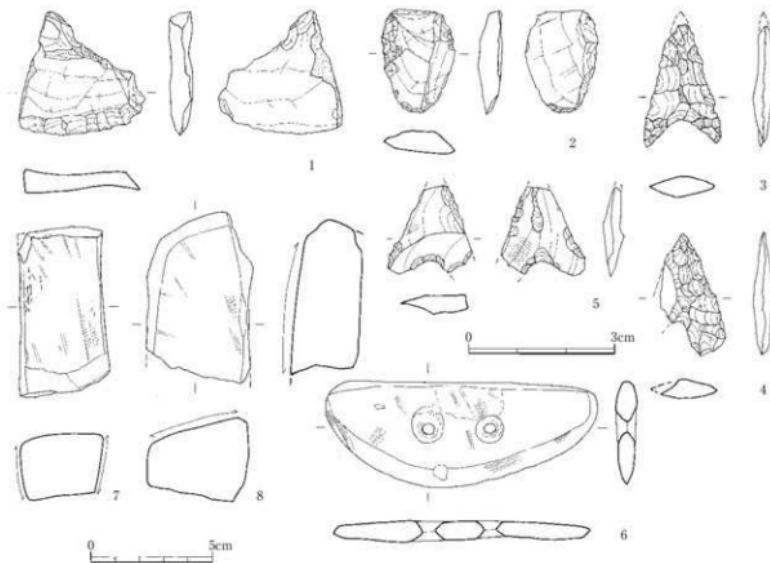
第36図 土坑・溝・ピット・石列遺構・埋甕遺構出土遺物実測図 (13は1/6、他は1/3)

4号土坑 (図版9、第35図)

B調査区北側、7号住居東で検出した小規模な土坑である。長軸 64cm、短軸 44cmの楕円形を呈し、深さは約 40cm で、南西にテラスを有する。当初テラスを別遺構と考えたが、断面観察から同一遺構と判断した。埋土は自然堆積に近いが、上層の黒色土・黒茶色土は 1号竪穴住居跡等の埋土上層のものと同じで、後世のものと思われる。

出土遺物 (図版21、第36図7~9)

全て弥生土器。7は鋤先口縁の甕口縁部小片で、端部がやや下がる。マメツの為調整や丹塗りの有無は不明。8・9は平底の甕底部片。底部の屈曲は明瞭で、いずれもマメツの為調整不明。



第37図 出土特殊遺物実測図(1)(3~5は1/1, 他は1/2)

1号溝(図版10、第35図)

B調査区中央やや北寄りで確認した東西に軸を持つ細い溝で、東側は削平されて途切れるが長さ17.2mを検出した。3・7号竪穴住居跡を切って調査区を横断する。幅は最大60cmで、底部は連続土坑状に凹凸があり、深さは最深で23.5cmを検出した。底面の高さから水は東から西に向かって流れると考えられ、西にあった河川に流したのであろう。埋土は硬質の黒茶色土單一土層で、遺物は数点出土したが、弥生後期～古墳前期の小片であることから混入と思われる。黒茶色土は各遺構の上層、または窪み状の箇所に入ることから、新しい時期の整地によるものと思われ、この溝も整地に近い時期のものと考えられる。

出土遺物(第36図10)

10は土師器の甕で、やや器壁が厚い。マメツの為調整は不明。

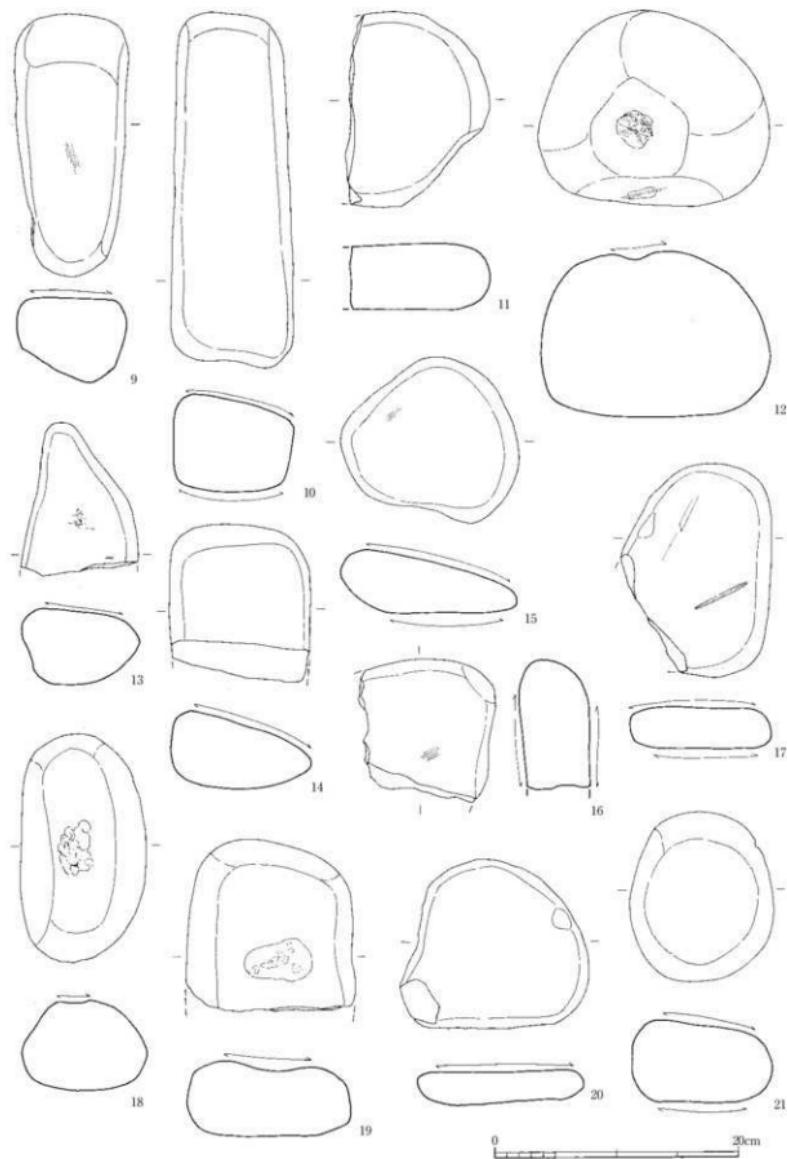
その他の遺構

ピット出土遺物(第36図11・12)

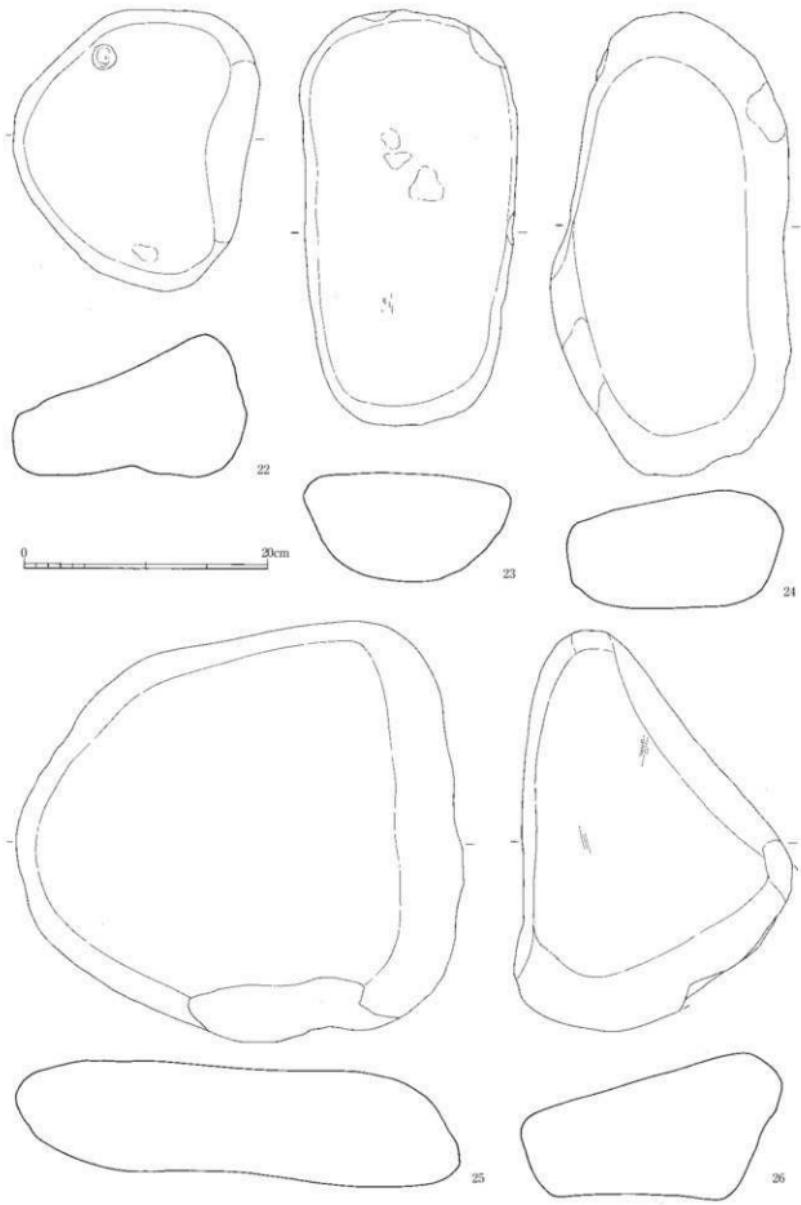
11は土師器の甕の口縁部片で、器壁が薄く強く屈曲する。12は素焼きの甕底部片で、平底で内外面ともハケ調整する。

埋甕遺構

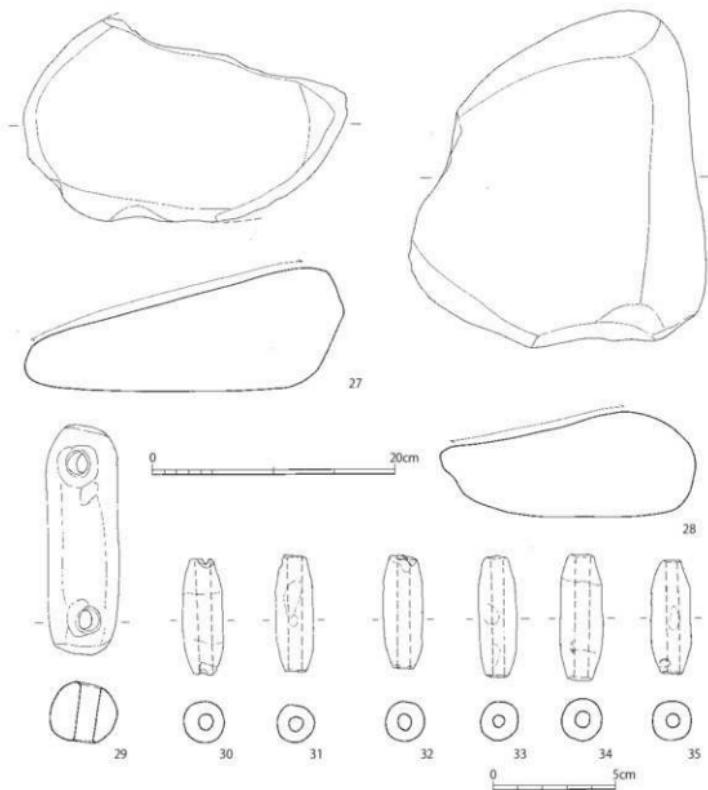
B調査区南側中央で検出した。上半部が削平されて胴部中位以下しか残っておらず、堀方も不明



第38図 出土特殊遺物実測図(2)(1/4)



第39図 出土特殊遺物実測図(3)(1/4)



第40図 出土特殊遺物実測図(4) (27・28は1/4、他は1/2)

瞭であった。

出土遺物 (図版21、第36図13)

13は陶器の平底の甕で、外面は摩滅するが底部付近にハケ目がわずかに残る。内面はハケ目が顯著で、底部は斜位の放射状にハケ調整を施す。

石列遺構 (図版9、第35図)

A調査区で確認したものの、現代まであった池や河川の護岸と考えられる。西側の落ちの埋土からは現代の遺物しか出土しなかったが、石列内部から現代の遺物に混じって19世紀の陶器が出土した。石列の設置はこの陶器の可能性も考えられる。

出土遺物（第35図14）

14は体部から口縁部にかけて直立し、高台は削りだしの割高台である。外面に薄い黄褐色の釉がかかり、内面は無釉。江戸後期の肥前系陶器で、黄釉香炉と考えられる（遠藤啓介氏の教示による）。

その他の遺物

石製品（図版21・22、第37～40図、表1）

1～6は打製石器で、いずれも縄文時代後期のものと思われる。1は完形品の石匙で、片側面の長辺2辺に剥離調整で刃部を造り出す。主要剥離面を大きく残し、反対面は剥離を施さず、短辺には原石面が残る。

2は完形品のスクレイバーで、片面側の縦長剥片の3辺に、やや粗い剥離調整で刃部を造り出し、反対面は2辺に粗い剥離を施す。

3～5は打製石鎌でいずれも凹基式鎌。3はやや縦長で抉りはやや浅く、切っ先を衝撃剥離で折損する。4もやや縦長で、抉りは深い。5は平面形状が正三角形に近く、抉りが浅い。切っ先と基部の片方を欠損する。刃部の剥離は粗く、両面とも主要剥離面を広く残す。

6は石包丁で完形品に近く、横長の半月形を呈する。穿孔は中央寄りで、紐ずれの痕跡はあるが使用痕があまり認められない。

7・8は砥石。7はほぼ完形品で4面を使用している。8は2面に擦痕が認められ、他は欠損する。3号竪穴住居跡の屋内土坑下位の埋土からの出土で、住居に確実に伴う。

9～19は磨石。9・10は縦長で、9は一面を使用し、中央に強い擦痕が認められる。10は4面を使用する。11は図左を欠損し、上面に擦痕が認められる。12は図下を磨石として使用し、上面に細かい敲打による深い凹みがある。13は1面のみを使用し、擦痕と一部敲打痕が認められる。14も一面のみを使用するが使用痕は薄い。15は完形品で、上下2面を使用し、図下に浅い凹みを有する。16は欠損が激しいが、上下2面を使用する。17も上下2面を使用し、上面には深い傷があるが人為的なものか否か不明である。18は完形品で、上面1面を使用する。19も完形品で、上下2面を使用する。

20・21は凹石。20は縦長の完形品だが全体に風化が激しく、上面中央に強い敲打による凹みがある。21は図下を欠損する。残存する中央やや下に敲打による凹みがあり、擦痕も認められる。

22～28は台石で、いずれも上面に擦痕が確認できる。24は図右半部が被熱し、25は大型品で平坦面が広いが、使用痕があまり認められない。28は図左を欠損するが、風化度が他力所と変わらないため当時の欠損かもしれない。

土製品（図版22、第40図29～35）

いずれも土錐。29は大型で断面円形を呈し、全体をナデ調整で仕上げる。上下2カ所に穿孔があるが、それぞれ少し角度を変えて貫通させており、紐を通した際にひねりを加えるものか。6号竪穴住居跡からの出土だが、埋土上層からの出土で、住居に伴わない可能性が高い。30～35は縦長で縦位の中央に穿孔があるもの。全てナデ調整で仕上げるが、31は特に調整が丁寧である。全て表土や攪乱から出土した。

(4)まとめ

今回の調査では、これまで吉富町では確認されていなかった弥生時代中期・後期、古墳時代初頭・前期・後期、近代の集落遺跡の一部を調査した。検出した遺構は竪穴住居跡、土坑、溝などであるが、吉富町では古墳以外の遺跡の調査が希少で、集落遺跡の本格的な発掘調査は今回が初めてである。また、1号竪穴住居跡からは一括廃棄と考えられる多量の遺物が出土し、これまでにない良好な資料を得ることができた。

各遺構の時期については、竪穴住居跡は3号が弥生後期後葉、2・7号が古墳時代初頭、1・6号が古墳時代初頭～前期前葉と考える。4・5号は埋土がほとんど残らず、出土器は少量で混入の可能性が高いため時期の確定はできないが、古墳時代初頭～前期の可能性が高い。土坑は弥生時代中期～古墳時代後期及び近代で、他の遺構は確認できなかったものの、同時期の集落の存在を示唆する。溝は掘削時期が不明であるが近代以降と考える。また、遺構は確認されなかつたが、縄文時代の石器が出土している。

今回の調査で特に注目されるのが1号竪穴住居跡と7号竪穴住居跡である。

まず、1号竪穴住居跡では大量の土器などの資料が出土したが、その包含層や土器そのものの堆積状況から、住居廃棄後まもなく、焼土や炭・石などとともに北東側からの投げ込みによって一括廃棄されたものと考えられる。この土器群が1号竪穴住居で使用されたものか、他住居で不要になったものかは不明であるが、住居廃棄後まもなくの投棄であることから、1号竪穴住居の使用最終段階に近い時期を示すと考えられ、また古墳時代前期の一括資料として良好な資料であろう。これらの中には畿内や瀬戸内地域の影響を受けるものも認められ、さらに土器の作りや調整の精粗、胎土の違いが認められることが特徴である。まず、第6図6の円形浮文を貼付する複合口縁壺は、形状も特徴的だが胎土がきめ細かで色調が薄く、調整も丁寧で器面も滑らかである。第20図148・165の鉢や第22図183の高杯は器壁が薄く胎土も精良で、器形もシャープで均整が取れて美しい。第21図180の鉢は胎土がきめ細かく、第13図78・79は極めて器壁が薄く極めて軽いもので、口縁端部の形状にも特徴がある。これらの資料は明らかに他資料とは一線を画し、直接的な搬入品か否かは断定できないが、生産場所が他資料と異なることは明らかである。また、これほど顕著ではないが、同じ器種の中でも大きな違いが認められる資料がある。一方は器壁が薄く胎土もやや精緻で、器形は均整が取れて重量が軽い。他方は器壁が厚く胎土に砂粒が多く、器形に歪みがあり、ずっしりと重量感がある。同器種での比較で言うと、第6図5と第6図3・8・第7図13・14の違い、第9図30と第8図22の違い、第12図63・64・66・第13図71・76と第12図67・116・第18図124・125・131の違いである。さらに、重量に特徴はないが、調整が粗雑で器形も整わず、洗練されないイメージを受ける資料も多い。第8図23・25・第10図47・第11図49・第15図90・第16図102・110・第20図157・第21図172・第22図192などがそれで、102や110は器壁は薄いが調整は粗雑で器形も整っていない。つまりは他地域の搬入品かその影響を強く受けるものと、地元産ではあるが洗練されたものと洗練されないものが認められるのである。細かく胎土を観察したわけではなく、また近隣の同時期の土器との比較はできていないが、土器生産技術の顕著に異なる多種類の土器が、同時期に同じ集落で併行して使用されていたようである。一括廃棄資料であるため、使用された住居が異なるなどの実態は不明であることが残念だが、一集落、しかもさほど大きいとは

思えない集落において、明確に生産地が分かれる土器が数多く混在することは、当時の土器生産や交流を考える上で興味深い。

次に7号竪穴住居跡は出土遺物から古墳時代初頭の時期が考えられるが、やや不正ではあるが直径4.2～4.4mの円形を呈し、主柱穴は2本で直径15cm前後と小さ目で、中央には赤変は認められないが炉様の土坑があり、南側壁付近には屋内土坑を有する。当初、出土土器の時期から円形になることに疑問を持ったため慎重に検出を行ったが、やはり円形を呈するものであった。福岡県内の同時期の円形住居跡は、東九州自動車道関係の調査において行橋市上片島遺跡群で3棟が出土し、方形住居跡と共存することが報告され、考察もなされている^(註1)。同考察内でもう一例挙げられた刈田町下稗田遺跡の円形住居跡は弥生時代後期のものではあるが、系譜としては繋がるものであろう。これまでも大分平野や瀬戸内地域では、弥生時代後期～古墳時代初頭にも全体が方形住居に移行しながらも、円形住居が採用される特徴が指摘されており、また同遺跡内の出土遺物に瀬戸内系土器が含まれることから、瀬戸内地域との交流や移住の可能性が指摘されている^(註2)。上片島遺跡でも瀬戸内系土器が出土しており、当和井田遺跡でも瀬戸内地域の影響が考えられる遺物が出土していることから同様の状況が考えられ、こういった状況が大分平野のみならず、瀬戸内海に面する豊前地域の広範囲に及ぶことが示唆される。なお、7号竪穴住居跡の東側に位置する3号竪穴住居跡は長方形でベッドを持ち2本柱のもので、弥生時代後期後葉とやや時期が遅るが、7号竪穴住居跡と微妙な時期差があり、一時期併存した可能性もある。弥生時代から古墳時代へと移行する時期の集落形態の変化の中で、瀬戸内海に面した地域の独特な交流や交易の様相を窺がうことのできる一要素であろう。

また、7号竪穴住居跡は床面直上で複数の炭化材片が出土している。炭化材は小規模なものが少數認められるのみであることから焼失住居跡とは考えられず、住居廃絶後、柱や棟材を転用のためか撤去した後に、小規模な建材ごと焼却したものであろうか。本調査で検出した全ての竪穴住居跡の埋土には、量の多少はあるものの炭や焼土塊が認められる。炭化材が出土したのは7号竪穴住居跡のみではあるものの、1号竪穴住居跡の一括廃棄土器には被熱するものが多く、焼土塊や炭も多數出土している。3号竪穴住居跡では多量の焼土塊がベッド上や床面近くに堆積しており、7号竪穴住居跡の出土状況と近似している。この集落では、住居廃棄後に必要な建材を抜き取った後、焼却するなどの行為が通常的に行われていたのかもしれない。

その他住居の構造等も若干特徴がある。1号竪穴住居跡には性格は不明であるがベッドの内側や屋内土坑の両側に溝が敷設されており、ベッド内側の溝は浅いものであることから排水溝などの可能性が考えられる。屋内土坑両側の溝はやや深さがあり、壁や板などの設置が考えられるが、さらに屋内土坑内には小ピットが認められ、これは梯子や土坑の覆いなどの柱の可能性があり、両側の溝とあわせて考える必要があるかもしれない。溝の埋土はいずれも軟質の淡灰色粘質土で、壁溝の埋土とも共通する。なおピットについては、形態は異なるものの3号・6号竪穴住居跡の屋内土坑内にも認められる。また、1号竪穴住居跡南東隅の柄杓が入っていたピットは、ベッドを切り、住居跡埋土に埋められていることから住居の付帯施設と考えると、柄杓が入っていたことや40～45cmの深さがあったことから、水溜などの可能性も考えられる。これらの性格についてはここでは検討は難しいが、住居内施設を考える上で材料のひとつになるのではと考える。また2号竪穴住居跡

も挙げておきたい。他住居跡に比べて極めて小型で主柱穴も小さく、他竪穴住居跡と比して残りが悪いわけではないわりにベッドや、中央に炉跡や炭・焼土などが確認できなかった。出土した高壙の器形もあまり類を見るものではなく、やや異質な感を受けるものである。その性格については不明であるが、竪穴住居跡とされるもの全てが「住居」ではない可能性は高く、別機能に使用された施設である可能性も指摘しておきたい。

もうひとつ、理解に窮したのがB調査区東南側である。遺構の存在が少ないと述べたが、1号竪穴住居跡を含む部分の基盤土にシミ状の汚れが多く、遺構と考えて掘削するものの顕著な形状を示さなかつたことから、トレーナーを設定して土層確認を行った。断面には一部曖昧な溝や土坑のような形状は認められるものの平面に下げるに明確には確認できず、一部拡張して掘削したが歪な形状になるか、トンネル状になるものばかりであった。第37図2のスクレイパーはこの土壤の最下位から出土したものであるが、その部分には平面・断面共に遺構らしき痕跡は認められず、その他の遺物も無かった。念のため埋め戻し前に重機で下げたが他に遺物は無く、遺構らしきものも検出できなかった。結論としては、ある時期の整地または土壤の流れ込みがあり、その上を基盤として古墳時代前期以降に集落が形成されたもので、スクレイパーはその折の混入と考える。1号竪穴住居跡出土の石器も含め、前時代の混入品と考えるが、つまりは縄文時代後期の集落等が近隣にあったことを示唆する資料であり、今後に期待がつながる資料である。

今回の調査では、調査区内が全体的に削平されて特に東側は遺構の残存状態が悪く、さらに北部には段造成され、西側は調査区外に延びる遺構を調査できず全容が知れなかった。古墳時代後期の土坑もほとんど残っていない状況から、既に削平された遺構もあると考えられる。昭和23年撮影の航空写真を見ると、調査区を含む集落が現在と同じように田畠の中に島状の高まりになっており、長い間低台地状になっていたことがわかる。当時の地形は不明であるが、今回検出した弥生時代～古墳時代の集落がさらに調査区東接の住宅地から東側に展開していたことも想定される。遺物のみの出土であった縄文時代の遺構も含め、今後周辺地域の調査の機会があればさらに当地域の歴史が解明されるであろうことが期待される。

註

- 1 九州歴史資料館 2013 「岩屋古墳群、上片鳥遺跡群」東九州自動車道関係、埋蔵文化財調査報告 - 5 -
- 2 行橋市教育委員会 1985 「下稗田遺跡」行橋市文化財調査報告書 第9集

表1 和井田遺跡出土石製品一覧表

図 番号	遺構名	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	残存	備考
37 1	1号竪穴住居跡	石匙	5.0	5.1	1.0	18.0	1.0	安山岩
37 2	トレンチ	スクレイバー	4.05	3.0	1.0	12.3	1.0	安山岩
37 3	6号竪穴住居跡	打製石鏃	(2.4)	1.55	0.4	(0.9)	0.9	姫島産黒曜石
37 4	4号土坑	打製石鏃	2.45	1.35	0.4	(0.8)	0.6	姫島産黒曜石
37 5	1号竪穴住居跡	打製石鏃	(1.75)	(1.70)	0.4	(0.9)	0.6	姫島産黒曜石
37 6	6号竪穴住居跡	石包丁	11.2	3.6	0.85	(48.8)	0.9	輝緑凝灰岩
37 7	5号竪穴住居跡	砥石	6.8	3.7	2.7	(111.2)	0.9	頁岩
37 8	3号竪穴住居跡屋内土坑	砥石	(6.8)	4.4	3.3	(75.6)	0.5	細粒砂岩
38 9	3号竪穴住居跡	磨石	16.5	7.0	5.3	(135.1)	0.9	安山岩質凝灰岩
38 10	1号竪穴住居跡	磨石	22.1	7.5	6.0	2004.8	1.0	安山岩質凝灰岩
38 11	1号竪穴住居跡	磨石	12.15	(8.9)	4.1	(734.2)	0.6	安山岩質凝灰岩
38 12	3号竪穴住居跡	磨石	12.2	14.3	10.2	2649.0	1.0	安山岩質凝灰岩
38 13	3号竪穴住居跡	磨石	(9.35)	(7.3)	4.7	(416.2)	0.3	凝灰岩
38 14	3号竪穴住居跡	磨石	(9.85)	8.75	4.75	(54.8)	0.5	安山岩質凝灰岩
38 15	3号竪穴住居跡	磨石	10.2	11	3.9	549.5	1.0	安山岩質凝灰岩
38 16	攪乱	磨石	(5.9)	(5.6)	2.9	(144.2)	0.2	安山岩質凝灰岩
38 17	2号土坑	磨石	13.05	(9.3)	2.6	(520.3)	0.7	安山岩質凝灰岩
38 20	3号竪穴住居跡屋内土坑	磨石	10.4	11.6	2.1	425.4	1.0	安山岩質凝灰岩
38 21	3号竪穴住居跡	磨石	10.5	9.0	5.0	726.6	1.0	安山岩質凝灰岩
38 18	1号竪穴住居跡	凹石	14.15	7.8	5.5	834.4	1.0	安山岩質凝灰岩
38 19	3号竪穴住居跡	凹石	(10.7)	10.45	4.60	892.2	0.6	安山岩質凝灰岩
39 22	1号竪穴住居跡	台石	23.3	20.1	11.8	6900.0	1.0	安山岩質凝灰岩
39 23	3号竪穴住居跡	台石	34.5	17.9	8.9	8500.0	1.0	安山岩質凝灰岩
39 24	1号竪穴住居跡	台石	38.8	19.9	9.7	9000.0	1.0	安山岩質凝灰岩
39 25	3号竪穴住居跡	台石	(34.6)	36.8	10.0	19200.0	0.9	安山岩質凝灰岩
39 26	1号竪穴住居跡	台石	33.1	(22.8)	12.3	10000.0	0.9	安山岩質凝灰岩
40 27	3号竪穴住居跡屋内土坑	台石	(16.8)	(26.9)	10.2	5477.7	0.6	安山岩質凝灰岩
40 28	1号竪穴住居跡	台石	22.7	24.25	8.7	8000.0	1.0	安山岩か?

2 成恒山ノ内遺跡

(1) 遺跡の概要

本遺跡は福岡県築上郡新吉富村（現上毛町）大字成恒に所在する。調査時、現道は略南北方向に蛇行して敷設されていて、拡幅は線形をスムーズにするために現道の東西の水田・宅地を取り込んで設計されていた。当初の調査対象地は南北長 150 m 余に及ぶ現道の東西に設定した。西側調査区では複数の溝や柱穴を確認したが、ここでは調査区内で表土を反転したために全体を俯瞰できる写真はない。一方、東側の調査区では試掘調査で柱穴と判断した「遺構」が単なるクロボクの落ち込みであって確実な遺構は存在しないと判断し、表土掘削を行ったものの図面などの記録作成を行っていない。この報告は現道西側の調査区について行う。

(2) 検出遺構

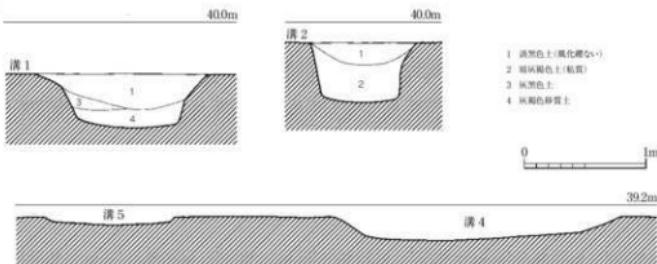
複数の溝・柱穴を検出した。溝はいずれも最上層にクロボクに由来する黒色土が堆積していて、重複する部分でも検出面で先後関係を確認できなかった。また、いずれも小規模なもので、出土遺物もごくわずかである。柱穴は直径 0.2 m ほどのものが多く、建物跡を構成するものは認められなかった。

1 号溝（図版 23・24、第 41・42 図）

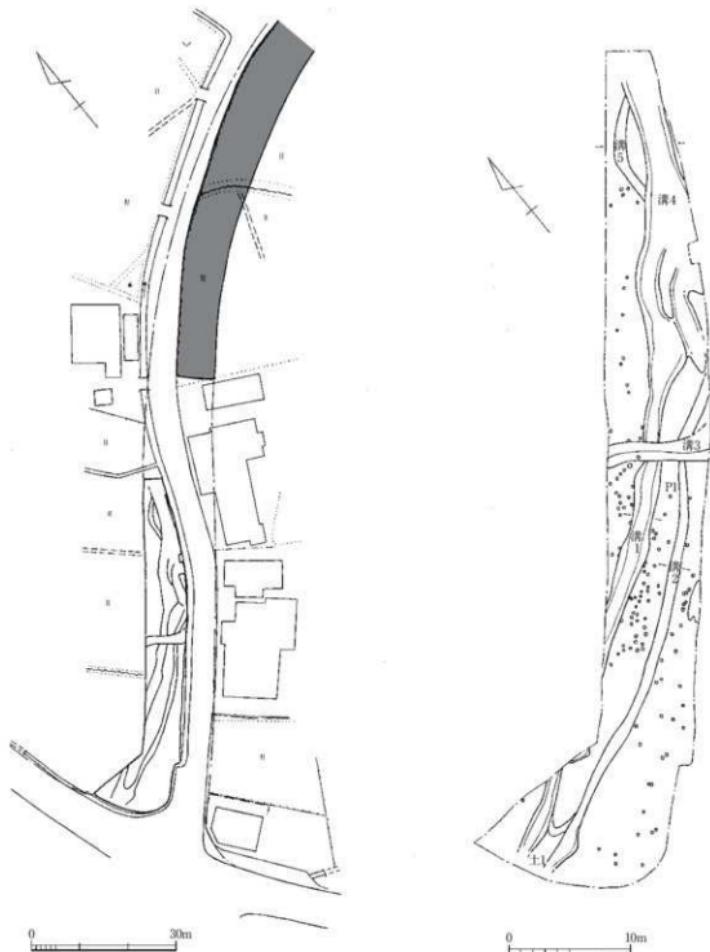
調査区内を南西-北東方向に走る溝で、幅 1.5 ~ 2 m ほど、深さは 0.3 ~ 0.4 m ほどの規模で、50 m ほどの長さを確認した。直角方向に交わる 3 号溝に切られていて、その北東部で 4 号溝とした遺構と重複するが明瞭な先後関係は把握できなかった。表層は漆黒といつてもよい黒色土で地山の風化跡を多く喰んでいて、下位には灰褐色砂質土が堆積していた。床面の標高は調査区南端で 39.5 m、3 号溝付近で 39.2 m、4 号溝と重複する付近で 39.1 m となっていて北へ向かって傾斜する。

2 号溝（図版 23・24、第 41・42 図）

1 号溝の東側、1.5 ~ 3 m の間隔を置いて 1 号溝に並行するような形で掘削された溝で、40 m ほ



第 41 図 溝土層・断面実測図 (1/40)



第42図 成恒山ノ内遺跡遺構配置図 (1/1,000, 1/400)

どの長さを確認した。これも3号溝に切られ、北端は4号溝と重複するが、調査区に位置することもあるって十分な確認ができない。幅約1m、深さ0.4m前後の規模であるが、土層図に見るよう東西壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土上層は1号溝と同じ黒色土、下位には1号溝のそれより暗い色の粘質土が堆積していた。この床面の標高は南端で39.6m、3号溝付近で39.2mとなり、1号溝とは同じといつてもよい深さである。

3号溝（図版23～25、第43図）

調査区の中程で検出した1・2号溝と直角方向に掘削された溝状の遺構である。最大の幅は1.8mほどであるが、南側は勾配の緩い緩斜面となっていて、北側の幅0.8～0.9mの間が0.1mほど掘り込まれて礫が敷き詰められたような状態で現れた。東端付近では礫の範囲が広がるとともに北辺の肩がはっきりつかめなかった。本来の形状を保たず、乱れているようである。礫は重層するものがほとんど無く、また角が取れているが、川原石のような扁平なものではなくまた地山に含まれる風化礫でもない。

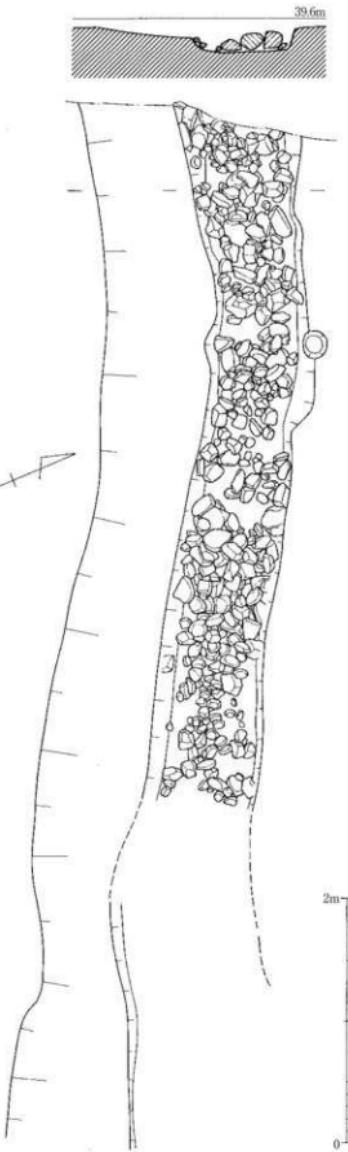
4号溝（図版25、第42図）

3号溝の北側で現れ、ほぼ方位にのって南北方向に掘削されている。2・4号溝と重複するが明確な先後関係は確認できていない。ただ、調査時のメモによれば4号溝が2号溝に後出するように描いてあり、詳細な記述がないがそう判断されたのであろう。

幅2m内外、深さ0.1～0.2mの浅いもので、表層は他と同じ黒色土が覆っていた。

5号溝（図版25、第42図）

調査区北端付近で検出した弧状溝で、幅約1m、深さは0.1mに満たない浅いものである。4号溝に切られていると判断したが、4号溝東辺がほぼ調査区境となっているために東側の状況がわからない。最初に開けたトレンチで深さが数cmに過ぎないことが判明



第43図 3号溝実測図 (1/40)

したために、掘削しないままに写真を撮影している。

(3) 遺物 (図版26、第44・45図)

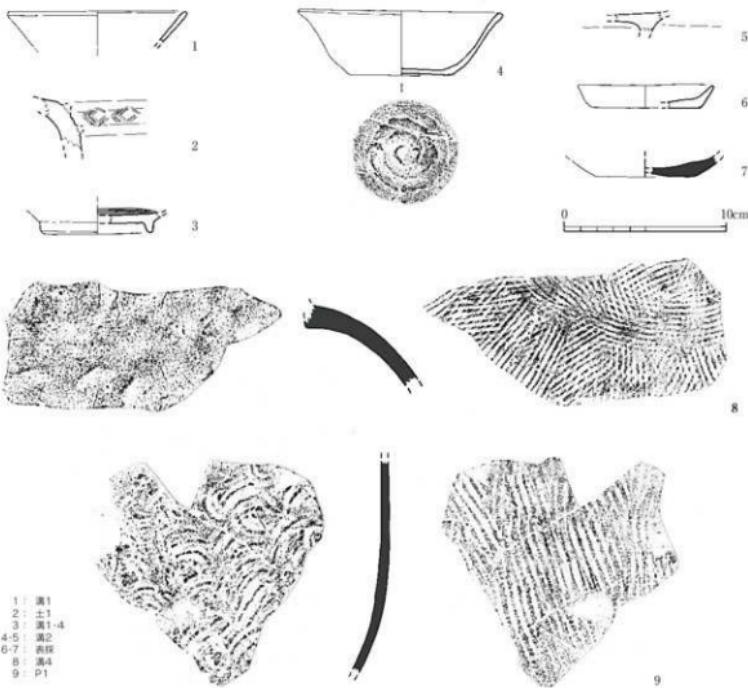
出土遺物は全体でも点数を数えられるほど非常に乏しい。

1は1号溝出土の土師器小片。器壁が薄く、胎土は非常に精良である。黄白色～灰白色を呈する。他に土師器と思われる窯体部片など数点がある。

2は調査区南端、1号土坑としたところからの出土である。これは1・2号溝が接近し、両溝を覆う様に黒色土が広がっていたものをそう呼称したが、結果的に遺構と呼べるような明確なものではなかった。2は土師質の火鉢あるいは風炉小片。剥落した突帯の間に二重の菱形のラインが浮き出るスタンプを連続させる。

3は1・4号溝の合流部付近出土の黒色土器。外面は灰白色、内面は黒色化し、施磨きが施される。高台内に切り離し痕は見えない。器表の遺存状態が非常によい土器である。

4・5は2号溝出土。4は唯一全体が覗える土師器環で、このような残存状態良好な土器が1点



第44図 出土遺物実測図1 (1/3)

だけ存在することは、出土遺物の総量から見ると奇異な感を覚えるほどである。底部は完周、口縁部も1/3ほどが残存する。復元口径12.7cm、器高は4.0cmである。全体に横ナデで丁寧に仕上げるようであるが、底部外面はヘラによる切り離し痕をそのまま残す。5は土師器底部片で、しっかりとした高台をもつが、これはいかにもローリングを受けた感がある。

6・7は表採品。6は胎土精良な土師器皿で、口縁部が小片のため復元口径に不安がある。外底面は回転糸切りのようである。橙白色といった色となる。7は須恵器小片。身か蓋か判然としないが、図で底部とした部分の外面は丁寧にナデるようで、蓋とすべきか。

8は異形の須恵器。頭部内面の稜が残るが、通常であれば頭部付近外面は横ナデで仕上げるのだが、これではタタキが付されるのみである。しかも叩き痕が水平方向に連続していて、これは通常では底部付近に刻されるものであろう。実際に自然釉は図下の方が濃いようである。外面の平行叩きはしっかりと刻されているが、内面では当て具痕の跡は見えるが同心円文は全く見えない。

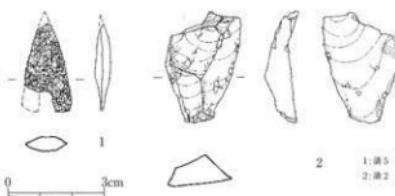
9はP1とした柱穴出土の須恵器片で、これは焼成甘く瓦質に近い。図では体部下半のように示したが、残存部上端付近では水平方向でもかなりの彎曲を示すので、横瓶のような形状であるかも知れない。

第45図1は安山岩製石鎌で、先端及び左側下端を欠き、残存長2.7cm、厚さ0.5mm、1.39gを測る。細部調整に難があるが、縄文時代の古い段階に属するものであろう。2は灰味帯びる黒色の腰岳産黒曜石の剥片で図下端にわずかに自然面を残す。これは風化の進行も含めて旧石器時代に属する可能性がある。

(4)まとめ

遺構・遺物ともに希薄であったが2号溝出土の土師器坏1点はどういう訳か残存状態がよく、この溝の存続した時期の一端を示してくれる。佐藤浩司氏によれば、福岡県東部では「回転ヘラケズリは8世紀中葉～後半まで盛行するが、9世紀前半には回転ヘラ切りに替わり、以後この手法は糸切りが採用される一〇世紀前半段階まで続く。」という。また、古代九州を統括した大宰府では、8世紀後半から10世紀中葉にかけて土師器坏の口径は小型化の一途をたどることが指摘されていて、地理的に大きく離れているけれどもその成果を援用すれば2号溝出土の土師器坏は9世紀前半に位置付けることができる。

この坏が9世紀前半に比定できるとした場合、同じく2号溝から出土した器表が荒れる高台付土師器の評価はどうであろうか。一般に9～10世紀の土師器の高台は高く、外方へ強く踏ん張るとされ、第44図5に示した形状は合致しない。「土師器」と報告したが焼成は堅致であり酸化炎焼成された須恵器と捉えれば、高台豊付が原状を残しているか判断が難しいものの高台が内側へ向いて付されることから9世紀前半の高台付坏として齟齬はない。この2号溝は9世紀代に埋没したた



第45図 出土遺物実測図2 (2/3)

1:10
2:2

3cm

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

2:

1:

と考えてよいであろう。

1号溝出土の土師器は小片であるが、胎土精良・焼成堅致であって中世的ではない。これも2号溝に近い時期に比定できそうである。4号溝の特異な須恵器は平行叩きがしっかりしていて、内面には当て具の痕跡は見えるものの同心円文を残さないことからいわゆる初期須恵器の範疇に位置付けられよう。これも残存状態が良好であるが、残片であり遺構の年代に直結して考えるには不安がある。1・4号溝合流部出土の黒色土器も丁寧な作りや高台が未発達なことから9世紀前半を中心とする時期に比定できそうである。

ここで検出した1・2号溝が古代に属する遺構であるとして、どのような性格が考えられるであろうか。第46図に調査当時の周辺の水田区画を示した。周辺地形は南西から北東に向かってなだらかに下降する形勢にあるが、その中でも調査地の直ぐ西側がピークの一つとなっていることがわかる。据は調査地南東の蘿原池（明治37年に着工・竣工）とそこから発する水路付近である。今回検出した溝状遺構はその間を弧を描いて掘削されていて、その形状からも条里地割に伴うものとは考えられない。京築地域の条里について復元を試みた日野尚志氏の論文でもこの成恒・安雲西部地区は施工区域外となっている。地形的に高く、開発が遅れたということであろう。

今回の調査対象地は幅狭く、溝と柱穴を除いて遺構を確認できなかつたため性格を云々できるような状況ではない。1号溝の下位に砂質土が認められたとはいはずれも砂層を確認できず、かえって粘質土の堆積が顕著であったことから、管理されなくなつて後に自然堆積で埋没したということであろう。

佐藤浩司「奈良時代の須恵器と土師器－旧農前国を中心として－」（『東アジアの考古と歴史』下岡崎敬先生退官記念論集、1987）

谷口俊治「農前企救郡における中世土器成立の契機について」（『東アジアの考古と歴史』下岡崎敬先生退官記念論集、1987）

横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」（『九集歴史資料館研究論集』4、1978）

日野尚志「農前国京都・仲津・築城・上毛郡における条里について」（『研究論文集』第22号、佐賀大学教育学部、1974）



第46図 成恒山ノ内遺跡周辺地形図

3 ハッ並下ノ原遺跡

(1) 遺跡の概要

ハッ並下ノ原遺跡は、上毛町新吉富村ハッ並の集落が立地する標高26～28mの安雲（あくも）台地上に立地している。この台地は標高807.1mの雁股山から延びる丘陵の先端部にあたり、随所で佐井川と黒川に開削されており、ハッ並地区の台地先端部も、佐井川の氾濫で分断されている。調査地点は290-1A・307-A番地で分断された2地区に分かれており、合わせた調査面積は630m²である。北側調査区は台地が大きく削平された平坦地であったため、浅い遺構はほとんど残っていないかった。南側調査区は南側丘陵の西端に位置しており、西側は大きな擾乱が入っており、北側は旧地形の緩斜面が残っていた。

(2) 調査の経過

平成11年12月13日にバックホーを入れI区の表土剥ぎ終了後、引き続き南側のII区の表土剥ぎを行い、I・II区を併行して調査した。I区からは大型掘立柱建物跡が検出されたことから、西側隣接地の地権者の許可を得て掘立柱建物跡北西部と、北端の柱穴列の延長上に柱穴が存在するかを確認した。平成12年1月6日に高所作業車により全景写真を撮影し、調査を完了した。

(3) 検出遺構と遺物

I区の調査

I区から検出された主な遺構は掘立柱建物跡1棟、落ち込み状遺構1基、溝状遺構1条、1号柵跡などである。

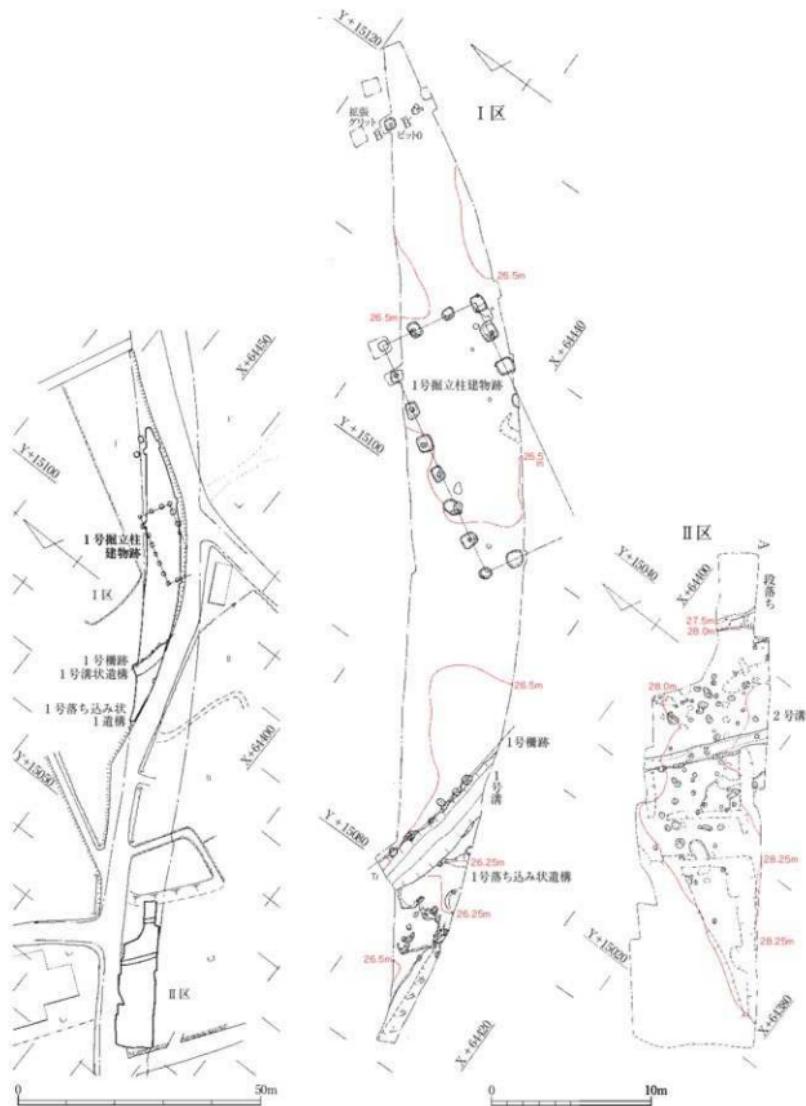
1号掘立柱建物跡（図版27、第50図）

北側調査区の中央部に位置する3×7間(660×1,440cm)の大型建物で、柱穴間は200～240cmを測る。柱穴の平面プランの多くは70×90cm前後の略方形で、深さは10～30cmほどで、北部ほど残りが悪い。柱痕はすべての柱穴から検出されており、柱9と10の東端には石で根巻きされた柱痕があったが、その中心が柱筋から外れていたので、建て替えの柱穴ではなく補強のための添え柱のようなものではないだろうか。

出土遺物に13世紀前半のものが含まれるが、柱痕に混入したものと見られる。古代に属する



第47図 ハッ並下ノ原遺跡
周辺地形図(1/2,000)



第48図 ハッ並下ノ原遺跡
道構略配置図 (1/1,000)

第49図 ハッ並下ノ原遺跡 I・II区全体図 (1/300)

のは第52図2の須恵器しかなく、時期を特定しづらいが、7世紀後半から8世紀前半に属するだろう。1号掘立柱建物跡はこの須恵器小片1点しか当該期の出土品がないが、口縁部が外反しないことから時期的には1号溝状遺構出土土器と変わらないだろう。

出土遺物（第52図）

1～3は1号掘立柱建物跡出土である。1は柱14出土の土師器小皿で、底面に糸切痕がわずかに残っている。2は柱7出土の須恵器坏で、径から小型品であろう。3は柱14出土の瓦器椀の底部で、13世紀前半代のものだろう。

1号溝状遺構（図版27、第49・51図）

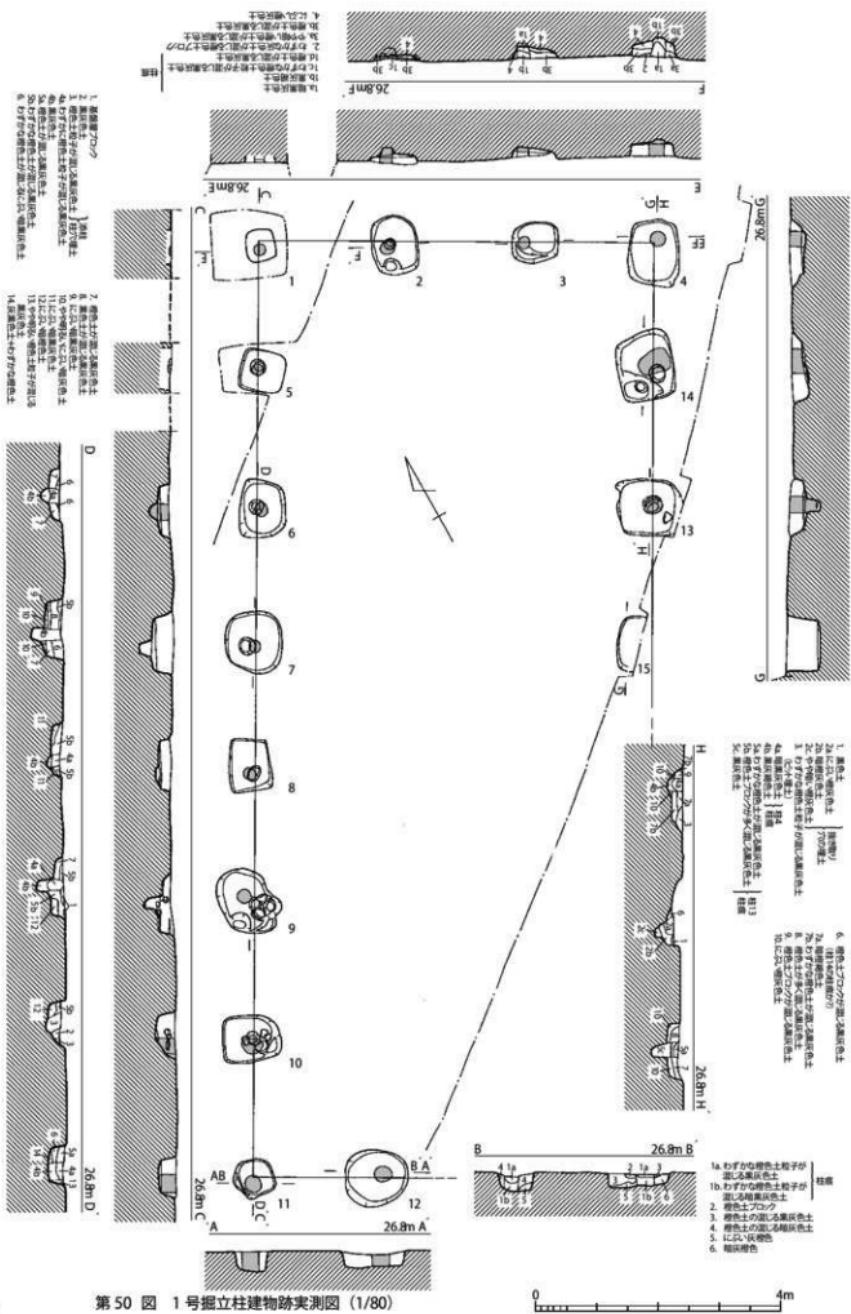
北側調査区の南端から検出され、検出面の幅は220cmだが、中位からは115cmほどに狹まる。断面逆長台形で、掘り直しで幅が広がっており、土層から2度の掘り直しがあったものと見られる。床面はほぼ平坦で、東に下がっている。壁の立ち上がりは急で、深さは2mに達する。上位が大きく削平されていることを考えると本来は3m近かっただろう。N-81°-W方向に走っているが、やや北に湾曲している。溝の北壁の上端に柱列があり、これは溝の壁に沿わせて柵を立てることで防御性を高める目的と、溝が埋没した後に溝に替わる区画として設けられた2通りの可能性が考えられる。南側に隣接する1号落ち込み状遺構とは切り合いが確認できなかった。埋土は床面直上に壁面の崩落による互層の堆積層がある。中位までは自然堆積したが、上位は人為的に埋められたようだ。南北からの浅い土層の重なりが見られる。

遺物量は少ないものの、溝からは円面鏡・褐釉陶器片（図版28）などの稀少な遺物が出土した。第51図11は中位の黒色土層上位、10は上層中位、ほかは上位出土で、上層中位の2度目の掘り直し溝は7世紀末に埋没しているので掘削したのは7世紀後半だろう。最終的には8世紀初頭に埋没している。

出土遺物（図版28、第52・55図）

第52図4は土師器の瓶の把手部で、接合部で外れたもので内面は残っていない。手捏ね成型で器面は摩滅している。5～7は埋土上位出土の須恵器の坏蓋で、5は口縁部が屈曲も肥厚もしていないので8世紀初頭。6・7は口縁部が屈曲して端部はナデ仕上げ。7は6より径がやや大きく、端部に小さな段がある。内面の口縁部は暗青灰色で内側は灰白色を呈するので、坏の高台の下で重ね焼きしていた可能性が高い。8世紀初頭。8・9は坏、10は径が大きく器高が低い坏で、8は高台が低く、小さく傾いている。高台内は回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。8世紀初頭に属する。9・10は高台が高く、9の坏部口縁部の傾きから7世紀末に属する。9は高台内回転ヘラ切り後ナデ仕上げ。10は火膨れた不良品で、高台内が灰白色なので正置して焼成している。11は壺の口縁部で、内外ナデで、口縁形態は7世紀末から8世紀初頭。12は壺の底部で、摩滅しているがタタキのナデ消しはない。外面は摩滅していない。13は円面鏡の脚部で、裾部外面に沈線が入る。方形の透し孔があり、透し孔の間隔は広い。

第55図1は1号溝上位出土の搔器で、幅の広い剥片を使用し、上端側につまみ部をつくり、下端と片側縁に刃をつける。姫島産黒曜石製で14.70gを測る。



第50図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/80)